

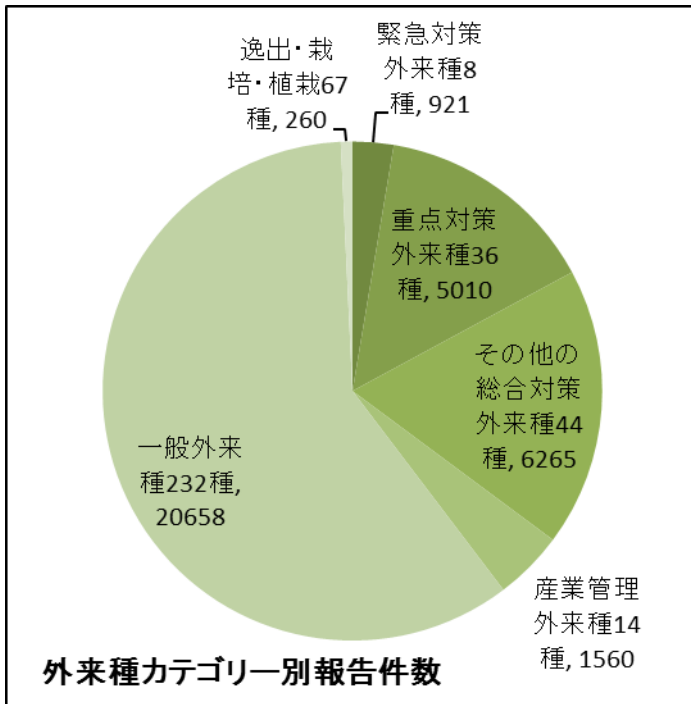
植物調査結果

(1) 調査結果の概要

この調査は平成28年度から始まった。3年間継続し、ここで終了するにあたり外来植物種3年間のデータを整理し報告する。

3年間の総報告件数は34,674件であった。昨年度末、一昨年度末にそれぞれ1年分の報告書をまとめているが、既報告書に記した報告件数と今回の報告件数は少し違う。これは過去のデータを精査しやや不確定要素を持つデータを外したためである。3年間を通してみると毎年度1万1～2千件の報告をいただいた。平成28年度が最大であった。3年間を通してほぼ均一的な報告件数となった。

調査年度別	報告件数
平成28年度(2016)	11020
平成29年度(2017)	12458
平成30年度(2018)	11196
3年間合計報告件数	34674



植物の3年間外来種報告件数は401種34674件である。

内訳は、左の円グラフ及び下表で示すように、特定外来生物でかつ「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（以下、生態系被害防止外来種リストという。）」にある総合的に対策が必要な外来種のうち、緊急対策外来種（以下、「緊急対策外来種」という。）の報告件数は8種921件であった。

また総合的に対策が必要な外来種のうち、重点対策外来種は36種5010件、同じくその他の総合対策外来種は44種6265件であった。さらに適切な管理を必要とする産業上重要な外来種（以下、「産業管理外来種」という。）は14種1560件であった。

それ以外の一般外来種は232種20658件、

栽培・逸出・植栽種は計67種260件であった。

	外来種カテゴリー別	報告件数	合計
①	緊急対策外来種8種	921	102種13756件
②	重点対策外来種36種	5010	
③	その他の総合対策外来種44種	6265	
④	産業管理外来種14種	1560	
⑤	一般外来種232種	20658	299種20918件
⑥	逸出・栽培・植栽67種	260	
	合計401種	34674	401種34674件

総報告件数34674件について、環境省の生態系被害防止外来種リストに挙げられている①緊急対策外来種、②重点対策外来種、③その他の総合対策外来種、④産業管理外来種の報告件数は13756件（全件数の39.7%）、それ以外の⑤一般外来種等（⑥逸出・栽培・植栽種を含む）は20918件（60.3%）であった。

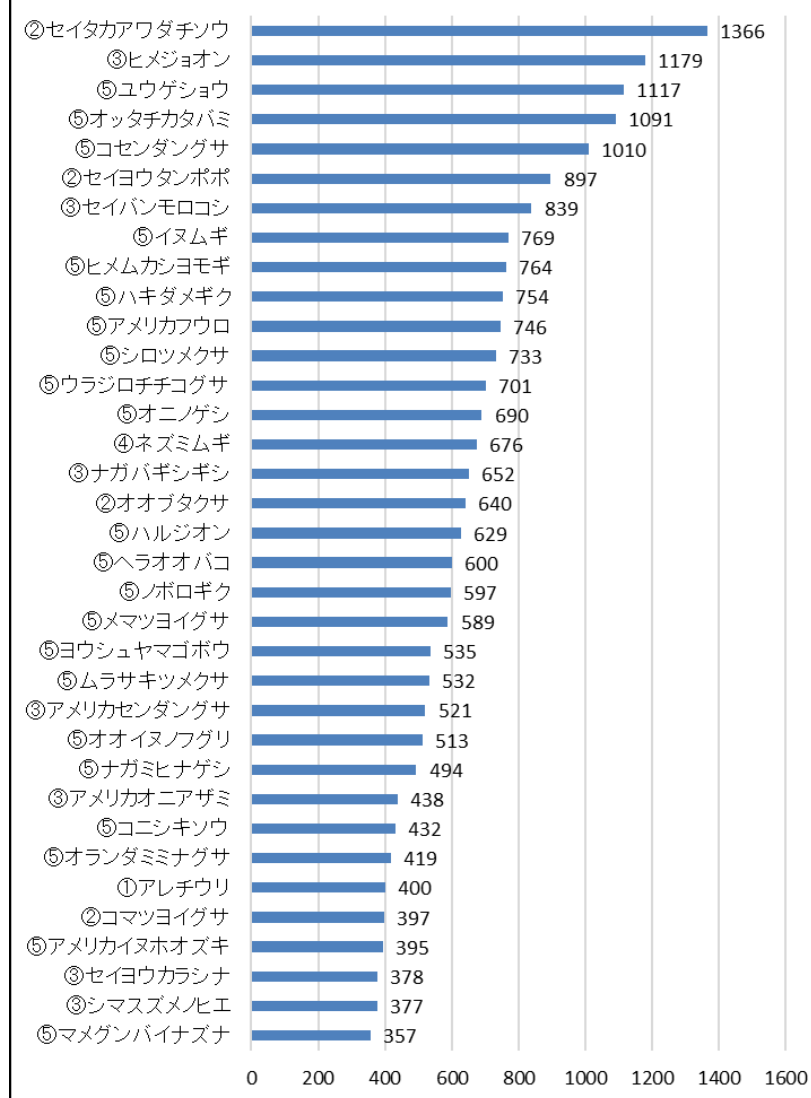
この比率は年度別に比較すると、ほぼ毎年度同じ比率であり、普遍的である。他県と比較するデータはないが、本県として生態系被害防止外来種リスト掲載種の割合はかなり高いように思う。しかも、掲載種の中には分布域を急速に拡大している種が含まれており、継続的に見守っていく必要性があり、場合により積極的な駆除策を検討しなければならない。

報告データの整理について

報告データを集計するにあたりいくつかの課題があった。植物の和名については同一種に対して別名が存在することが多く、これらを標準名に統一する必要があった。以下の表に基づいて変更した。そのほか誤字等については適宜正名に修正した。なお、平成 28・29 年度データの修正については、既に報告書に明記してあるのでここでは省略する。以下の表は平成 30 年度のデータについて対処したものである。

この和名は	こちらの標準名に変更	この和名は	こちらの標準名に変更	この和名は	こちらの標準名に変更
アイノコタンポポ	アイノコセイウタンポポ	カントウモドキ	未定種	ハナダイコン	ショカツサイ
アオビユ	ホナガイヌビユ	キーウイフルーツ	キウイフルーツ	バラモンギク	キバナムギナデシコ
アカローパー	ムラサキツメクサ	クレソン	オランダガラシ	ヒメジョオン	ヒメジョオン
アカツメクサ	ムラサキツメクサ	ゲンバココギク	ペラペラヨメナ	ヒメオオギズイセン	ヒメオウギズイセン
アキノゲシ	アキノゲシ	コセンダン	コセンダングサ	ヒロハウシノケグサ	ヒロハウシノケグサ
アレチマツヨイ	マツヨイグサ	コムラサキシキブ	コムラサキ	ヒロバギシギシ	エゾノギシギシ
アレチマツヨイグサ	マツヨイグサ	コンフリー	ヒレハリソウ	ブラジルコムカンソウ	ナガエコミカンソウ
イノコズチ	イノコヅチ	ショカツサイ	ショカツサイ	マルバルコウソウ	マルバルコウ
ウォーターマッシュルーム	ウチワゼニクサ	シロバナセンダングサ	コシロノセンダングサ	ムラサキアオゲイトウ	ホソアオゲイトウ
オオカワヂシャ	オオカワヂシャ	シンジュ	ニワウルシ	ムラサキハナナ	ショカツサイ
オオハルシヤギク	コスモス	ツルマンネン	ツルマンネングサ	ニホンスミレ	未定種
カラクサガラシ	カラクサナズナ	トゲヂシャ	トゲヂシャ		
カラシナ	セイヨウカラシナ	ニセアカシア	ハリエンジュ		

報告件数の多い外来種(上位35種)



報告件数の多い外来種

種別に3年間の報告件数を整理し、報告件数の上位35種について左のグラフを示した。1位は②重点対策外来種のセイトカアワダチソウ1366件であった。続いて2位は③その他の総合対策外来種のヒメジョオン1179件、3位は⑤一般外来種のユウゲショウ1117件であった。

4位は⑤一般外来種であるオッタチカタバミ、5位は⑤一般外来種のコセンダングサとなる。

グラフから、1位から7位までの傾斜はきつく、8位以降35位までの傾斜は緩やかである傾向が見て取れる。

この上位7種の中に①緊急対策外来種は出てこない。①は30位でアレチウリ174件がはじめて現れる。④産業管理外来種も出てこない。②重点対策外来種は2種セイトカアワダチソウとセイウタンポポ、③その他の総合対策外来種は2種ヒメジョオンとセイバンモロコシ、⑤一般外来種は3種ユウゲショウ、オッタチカタバミ、コセンダングサである。8

位以降についてみると、⑤一般外来種が連続する。8位イヌムギ、以下ヒメムカシヨモギ、ハキダメギク、アメリカカワウロ、シロツメクサ、ウラジロチチコグサ、オニノゲシいずれも一般外来種である。一般外来種の勢力は大きい。

それでは上位60種で見るとカテゴリー別の割合はどうか、上位80種はどうか、上位100種ではどうか、これらを整理したものが次の表である。この表から興味深いことが確認できた。一般外来種に注目すると、上位20種なら13種(65%)、上位40種なら26種(65%)、上位60種なら36種(60%)、上位80種なら44種(55%)、上位100種なら56種(56%)となっている。比率はやや下降きみながら切り口を変えても約6割を維持している。外来種全体としても、それなりにバランスをとりながら生育していることを思わせる。

外来種カテゴリー	最多20種	最多40種	最多60種	最多80種	最多100種
①緊急対策外来種	0	2	2	3	4
②重点対策外来種	3	4	8	12	14
③その他の総合対策外来種	3	7	10	16	20
④産業管理外来種	1	1	4	5	6
⑤一般外来種	13	26	36	44	56
⑥逸出・栽培・植栽種	0	0	0	0	0
合計	20	40	60	80	100

環境別報告件数

環境区分はA・B・C・Dの4区分である。環境が複合し4区分のいずれにも当てはまらない場合があったのではないと思う。しかし細かく設定すると全体の傾向が捉えられなくなる懸念もあり、1調査についていずれか1区分を選ぶことをお願いした。結果として、複合記入(「B,C」などとした記入)2件があったが、このデータについては、便宜的に最初の環境区分を採用した。環境別報告件数を全体としてみた場合、下表のような結果となった。

外来種カテゴリー	A雑木林	B河川敷	C水田・休耕田・畑	D市街地	総計
①緊急対策外来種	33	509	213	166	921
②重点対策外来種	546	1560	1478	1426	5010
③その他の総合対策外来種	487	1987	1832	1959	6265
④産業管理外来種	172	552	465	371	1560
①～④小計	1238	4608	3988	3922	13756
⑤一般外来種	1925	4875	6755	7103	20658
⑥逸出・栽培・植栽種	100	68	46	46	260
⑤～⑥小計	2025	4943	6801	7149	20918
①～⑥合計	3263	9551	10789	11071	34674
合計に対する①～④の占める割合	37.9%	48.2%	37.0%	35.4%	39.7%
報告34674件に対する各合計の割合	9.4%	27.5%	31.1%	31.9%	100.0%

全体の報告件数が最も多かった環境はD市街地31.9%11071件であった。最も少なかった環境はA雑木林9.4%3263件であった。およそA:B:C:D=3:10:11:11となる。雑木林の報告件数が少ないのは、雑木林に外来種は少ないのではないかとことから敬遠された可能性がある。

緊急対策外来種は河川敷からの報告509件が圧倒的に多いことに注目する必要がある。緊急対策外来種のアレチウリ、オオキンケイギク、オオカワヂシャ、オオフサモ、ミズヒマワリなどいずれも河川敷で繁茂する。

環境別報告件数合計(①～⑥)に対する生態系被害防止外来種リスト種(①～④)の割合をみると、河川敷が48.2%で最も大きい値となっている。市街地の値は35.4%で最も低い。被害をもたらすとされる外来種は河川敷に比較的多く集まっていることを示す結果となった。

環境別報告件数の詳細

種ごとに環境別報告件数を集計した。データは①緊急対策外来種、②重点対策外来種、③その他の総合対策外来種、④産業管理外来種、⑤一般外来種、⑥栽培種・植栽種・逸出種の順になっており、それぞれについては報告件数の多い順、同一件数の場合は和名の五十音順に配列した。

表 外来種の環境別報告件数 (1)

No	和名	外来順	A(雑木林)	B(河川敷)	C(水田・休耕田・畑)	D(市街地)	報告件数合計	解説頁
1	アレチウリ	①緊急対策外来種	19	256	104	21	400	植物16
2	オオキンケイギク	〃	11	68	89	141	309	植物20
3	オオカワヂシャ	〃	3	90	7	4	104	植物18
4	オオフサモ	〃		49	8		57	植物22
5	ミズヒマワリ	〃		41	2		43	植物24
6	ナガエツルノゲイトウ	〃		1	3		4	
7	ナルトサワギク	〃		3			3	植物116
8	ボタンウキクサ	〃		1			1	
9	セイトカアワダチソウ	②重点対策外来種	155	426	390	395	1366	植物40
10	セイヨウタンポポ	〃	115	227	267	288	897	植物42
11	オオブタクサ	〃	77	273	213	77	640	植物30
12	コマツヨイグサ	〃	19	105	122	151	397	植物36
13	アイノコセイヨウタンポポ	〃	30	50	71	87	238	植物98
14	ニワウルシ	〃	48	62	54	64	228	植物44
15	マルバルコウ	〃	12	54	100	62	228	植物54
16	シナダレスズメガヤ	〃	15	56	51	83	205	植物38
17	マメアサガオ	〃	5	53	40	28	126	植物52
18	キシヨウブ	〃	14	49	36	19	118	植物34
19	アメリカアサガオ	〃	2	29	23	36	90	植物26
20	ノハカタカラクサ	〃	15	16	6	45	82	植物46
21	オランダガラシ	〃	8	37	17	10	72	植物32
22	メリケンガヤツリ	〃		43	7	5	55	植物56
23	トウネズミモチ	〃	8	11	11	14	44	
24	マルバアサガオ	〃	4	10	22	7	43	
25	ヒメイワダレソウ	〃		1	18	17	36	
26	ヒメマツバボタン	〃	1	5	3	22	31	植物48
27	ホテイアオイ	〃	2	19	3	4	28	植物50
28	オオアワダチソウ	〃	5	6	6		17	植物28
29	イタチハギ	〃	6	8		2	16	
30	アサガオ	〃	2	3	5	2	12	
31	ツルニチニチソウ	〃	1	1	5	5	12	
32	コカナダモ	〃		2	4		6	
33	コゴメイ	〃		5			5	
34	オオカナダモ	〃		1	2		3	
35	ルコウソウ	〃		1		2	3	
36	スイレン	〃	1		1		2	
37	ナガバオモダカ	〃		2			2	
38	ランタナ	〃		2			2	
39	アカミタンポポ	〃				1	1	
40	アマゾントチカガミ	〃		1			1	
41	ウチワゼニクサ	〃		1			1	
42	タテバチドメグサ	〃			1		1	
43	チチブフジウツギ	〃		1			1	
44	ブッドレア	〃	1				1	

表 外来種の環境別報告件数 (2)

No	和名	外来順	A(雑木林)	B(河川敷)	C(水田・休耕田・畑)	D(市街地)	報告件数合計	解説頁
45	ヒメジョオン	③その他の総合対策外来種	134	292	378	375	1179	植物80
46	セイバンモロコシ	"	24	348	209	258	839	植物70
47	ナガバギシギシ	"	44	252	208	148	652	植物76
48	アメリカセンダングサ	"	47	152	199	123	521	植物60
49	アメリカオニアザミ	"	33	70	105	230	438	植物58
50	セイヨウカラシナ	"	8	230	88	52	378	植物72
51	シマスズメノヒエ	"	26	112	120	119	377	植物68
52	エゾノギシギシ	"	26	111	72	55	264	植物64
53	アレチヌスビトハギ	"	37	85	70	43	235	植物62
54	ムシトリナデシコ	"	13	27	66	88	194	植物84
55	オオオナモミ	"	3	58	75	13	149	植物66
56	ハルシャギク	"	7	42	42	52	143	植物78
57	ヒメツルソバ	"	6	15	13	106	140	植物82
58	タカサゴユリ	"	11	8	28	84	131	植物74
59	メリケンカルカヤ	"	10	16	28	35	89	植物86
60	ヤナギハナガサ	"	4	18	20	47	89	植物102
61	ハナニラ	"	15	12	19	32	78	植物100
62	フランスギク	"	8	15	17	26	66	植物104
63	シャクチリソバ	"	2	32	11	11	56	植物119
64	アレチハナガサ	"	1	25	15	13	54	植物117
65	キシウスズメノヒエ	"	1	18	14	6	39	植物119
66	ヒメヒオウギズイセン	"	10	3	13	8	34	植物121
67	ホシアサガオ	"		8	7	9	24	植物121
68	アメリカネナシカズラ	"	2	11	3		16	植物117
69	オオクサキビ	"	1	10	2	1	14	植物118
70	オオキバナカタバミ	"	2		1	7	10	植物118
71	ハルガヤ	"	2	5		2	9	植物120
72	ペラペラヨメナ	"		1		8	9	
73	ヒイラギナンテン	"	5				5	
74	アラゲハンゴンソウ	"	1	2	1		4	
75	ツルドクダミ	"	1		2	1	4	植物120
76	トキワサンザシ	"	1	1	1	1	4	
77	ヒメスイバ	"		1	3		4	
78	ドクニンジン	"		3			3	
79	ハルザキヤマガラシ	"	1	2			3	
80	シンテツポウユリ	"				2	2	
81	タチバナモドキ	"		1		1	2	
82	カミヤツデ	"				1	1	
83	ケナシヒメムカシヨモギ	"		1			1	
84	コウリンタンポポ	"	1				1	
85	タチスズメノヒエ	"				1	1	
86	チョウセンアサガオ	"			1		1	
87	ハマクマツヅラ	"			1		1	
88	ヨウシュチョウセンアサガオ	"				1	1	
89	ネズミムギ	④産業管理外来種	54	222	197	203	676	植物92
90	ホソムギ	"	11	88	89	51	239	植物96
91	ハリエンジュ	"	42	70	44	42	198	植物94
92	ナヨクサフジ	"	9	102	59	12	182	植物90
93	カモガヤ	"	14	25	24	23	86	植物88
94	オニウシノケグサ	"	4	20	20	15	59	植物106

表 外来種の環境別報告件数 (3)

No	和名	外来順	A(雑木林)	B(河川敷)	C(水田・休耕田・畑)	D(市街地)	報告件数合計	解説頁
95	ナギナタガヤ	④産業管理外来種つづき	5	5	12	12	34	植物123
96	オオアワガエリ	〃	2	10	2	3	17	植物122
97	モウソウチク	〃	11	1	3	2	17	
98	アメリカスズメノヒエ	〃	2	2	9	2	15	植物122
99	キウイフルーツ	〃	10	1		4	15	
100	マダケ	〃	4	1	4	1	10	
101	コヌカグサ	〃	1	2	2	1	6	
102	ハチク	〃	3	3			6	
103	ユウゲシヨウ	⑤一般外来種	66	287	385	379	1117	植物110
104	オッタチカタバミ	〃	115	252	349	375	1091	植物108
105	コセンダングサ	〃	93	270	346	301	1010	植物112
106	イヌムギ	〃	87	215	202	265	769	
107	ヒメムカシヨモギ	〃	68	151	247	298	764	
108	ハキダメギク	〃	72	76	381	225	754	
109	アメリカフウロ	〃	63	193	261	229	746	植物114
110	シロツメクサ	〃	71	188	251	223	733	
111	ウラジロチチコグサ	〃	66	119	184	332	701	
112	オニノゲシ	〃	59	144	260	227	690	
113	ハルジオン	〃	111	136	204	178	629	
114	ヘラオオバコ	〃	23	281	131	165	600	
115	ノボロギク	〃	31	83	291	192	597	
116	メマツヨイグサ	〃	44	169	185	191	589	
117	ヨウシュヤマゴボウ	〃	121	89	138	187	535	
118	ムラサキツメクサ	〃	27	242	139	124	532	
119	オオイヌノフグリ	〃	53	128	201	131	513	
120	ナガミヒナゲシ	〃	26	97	132	239	494	
121	コニシキソウ	〃	44	60	152	176	432	
122	オランダミミナグサ	〃	34	94	139	152	419	
123	アメリカイヌホオズキ	〃	43	60	141	151	395	
124	マメゲンバイナズナ	〃	22	91	122	122	357	
125	ヒメオドリコソウ	〃	41	80	84	89	294	
126	アレチギンギシ	〃	19	108	88	67	282	
127	オオニシキソウ	〃	25	62	120	70	277	
128	ムラサキカタバミ	〃	31	49	64	132	276	
129	ククイモ	〃	15	109	94	56	274	
130	オオアレチノギク	〃	19	43	86	116	264	
131	イモカタバミ	〃	26	48	66	116	256	
132	チチコグサモドキ	〃	21	22	62	136	241	
133	ホソアオゲイトウ	〃	10	52	105	45	212	
134	ワルナスビ	〃	21	54	60	64	199	
135	コハコベ	〃	31	33	65	52	181	
136	ヒルザキツキミソウ	〃	7	18	44	84	153	
137	タチイヌノフグリ	〃	19	26	43	63	151	
138	ニワゼキショウ	〃	17	35	44	54	150	
139	ブタナ	〃	16	22	40	58	136	
140	シヨカツサイ	〃	22	32	37	39	130	
141	ゴウシュウアリタソウ	〃	2	11	65	39	117	
142	ツルマンネングサ	〃	3	39	26	43	111	
143	コスズメガヤ	〃	8	7	43	48	106	
144	メキシコマンネングサ	〃	11	10	16	50	87	

表 外来種の環境別報告件数 (4)

No	和名	外来順	A(雑木林)	B(河川敷)	C(水田・休耕田・畑)	D(市街地)	報告件数合計	解説頁
145	オシロイバナ	⑤一般外来種つづき	5	19	19	43	86	
146	ツボミオオバコ	〃	8	17	28	29	82	
147	アカザ	〃	4	8	38	25	75	
148	カキネガラシ	〃	4	37	13	21	75	
149	アレチノギク	〃	2	7	18	46	73	
150	ミチタネツケバナ	〃	9	10	15	35	69	
151	コバンソウ	〃	4	8	5	51	68	
152	セリバヒエンソウ	〃	25	33	8	2	68	
153	セイヨウアブラナ	〃	8	33	15	10	66	
154	ヤセウツボ	〃		40	10	12	62	
155	ダンドボロギク	〃	17	11	13	19	60	
156	ブタクサ	〃	9	17	18	13	57	
157	タチチチコグサ	〃	1	3	18	32	54	
158	キバナコスモス	〃	8	9	18	18	53	
159	コメツブツメクサ	〃	2	18	12	21	53	
160	ハゼラン	〃	6	3	2	37	48	
161	ヒロハホウキギク	〃		18	19	7	44	
162	キキョウソウ	〃	1	10	9	22	42	
163	ジュズダマ	〃	2	18	14	5	39	
164	オオスズメノカタビラ	〃	6	9	12	11	38	
165	ベニバナボロギク	〃	15	3	7	13	38	
166	ゼニアオイ	〃	1	6	18	11	36	
167	アオスズメノカタビラ	〃	5	5	8	17	35	
168	アメリカカタサブロウ	〃	5	10	15	2	32	
169	タチアオイ	〃		7	13	10	30	
170	マツバウンラン	〃	3	3	5	17	28	
171	ビロードモウズイカ	〃	2	2	8	13	25	
172	ヤグルマギク	〃	1	7	8	9	25	
173	アメリカアゼナ	〃		2	20	2	24	
174	セイタカハハコグサ	〃	1	2	11	10	24	
175	ヨコハママンネングサ	〃	2	2	4	16	24	
176	イチビ	〃	3	2	11	5	21	
177	コスモス	〃	1	3	16	1	21	
178	ニラ	〃	5	6	7	3	21	
179	イヌカキネガラシ	〃		6	4	9	19	
180	コメツブウマゴヤシ	〃	1	11	3	3	18	
181	オランダハッカ	〃	2	4	6	4	16	
182	キバナムギナデシコ	〃			3	13	16	
183	コシロノセンダングサ	〃	3	8	2	3	16	
184	アメリカスミレサイシン	〃	7	1	1	5	14	
185	オオケタデ	〃		4	8	2	14	
186	ヒレハリソウ	〃	1	5	4	4	14	
187	ホソバヒメミソハギ	〃			14		14	
188	マツヨイグサ	〃		5	4	5	14	
189	オキジムシロ	〃		5	5	3	13	
190	ゼニバアオイ	〃		3	7	3	13	
191	ナガエコミカンソウ	〃		1	3	8	12	
192	ヒロハノウシノケグサ	〃	1	2	4	5	12	
193	マルバハッカ	〃		2	4	6	12	
194	ツタバウンラン	〃	1	1	1	8	11	

表 外来種の環境別報告件数 (5)

No	和名	外来順	A(雑木林)	B(河川敷)	C(水田・休耕田・畑)	D(市街地)	報告件数合計	解説頁
195	トゲチシャ	⑤一般外来種つづき			5	6	11	
196	ヒメコバンソウ	〃	2		3	6	11	
197	アレチニシキソウ	〃		1	4	5	10	
198	オオニワゼキショウ	〃	2	4	2	2	10	
199	オオマツヨイグサ	〃		3	7		10	
200	シナガワハギ	〃		5	1	4	10	
201	シュウカイドウ	〃	4	1	2	3	10	
202	ホナガイヌビユ	〃	1	1	5	3	10	
203	コバナキジムシロ	〃		3	3	3	9	
204	ナガイモ	〃	1	2	4	2	9	
205	ナンバンカラムシ	〃		2	3	4	9	
206	ムギクサ	〃		1	3	5	9	
207	アオゲイトウ	〃			2	6	8	
208	タマサンゴ	〃	1	3	1	3	8	
209	タマスダレ	〃		7		1	8	
210	ハタケニラ	〃		4	2	2	8	
211	ヒナゲシ	〃		3	4	1	8	
212	マルバアメリカアサガオ	〃		1	6	1	8	
213	アメリカキンゴジカ	〃	1		5	1	7	
214	オランダフウロ	〃		1		6	7	
215	ナガハグサ	〃		1	3	3	7	
216	ヒメキンセンカ	〃			3	4	7	
217	ユキヤナギ	〃	3	2	2		7	
218	アメリカヌスビトハギ	〃		6			6	
219	アリタソウ	〃		3	2	1	6	
220	イヌコハコベ	〃	2			4	6	
221	カラクサナズナ	〃		4		2	6	
222	クルマバザクロソウ	〃		1	3	2	6	
223	ケアリタソウ	〃	1	5			6	
224	スイセンノウ	〃		1	2	3	6	
225	ヒナキキョウソウ	〃		2		4	6	
226	フラサバソウ	〃		6			6	
227	ホウキギ	〃	1	1	3	1	6	
228	ヤクナガイヌムギ	〃		2	2	2	6	
229	カラスノチャヒキ	〃		3	1	1	5	
230	ゲンバイナズナ	〃		3		2	5	
231	ヒレタゴボウ	〃		1	3	1	5	
232	ホオズキ	〃	3		1	1	5	
233	モミジルコウ	〃		1	3	1	5	
234	ヨーロッパタイトゴメ	〃				5	5	
235	オオアザミ	〃		4			4	
236	ショウジョウソウ	〃			1	3	4	
237	ツノミナズナ	〃		4			4	
238	ハナヤエムグラ	〃			2	2	4	
239	ヒメゲンバイナズナ	〃		3		1	4	
240	ヒレアザミ	〃		2	2		4	
241	ヤナギバヒメジョオン	〃		2		2	4	
242	オノマンネングサ	〃			1	2	3	
243	セイヨウミヤコグサ	〃	2			1	3	
244	センダングサ	〃	2		1		3	

表 外来種の環境別報告件数 (6)

No	和名	外来順	A(雑木林)	B(河川敷)	C(水田・休耕田・畑)	D(市街地)	報告件数合計	解説頁
245	ニオイタデ	⑤一般外来種つづき		1	2		3	
246	ハナカタバミ	"		1	1	1	3	
247	ホウキギク	"		1	2		3	
248	ホソバオオアマナ	"	2	1			3	
249	ホソバツルノゲイトウ	"		1		2	3	
250	ホソミキンガヤツリ	"		3			3	
251	マカラスムギ	"		1	2		3	
252	ムクゲ	"		2		1	3	
253	ムラサキウラン	"				3	3	
254	ルリニワゼキショウ	"		2		1	3	
255	イヌカミツレ	"			1	1	2	
256	イヌコモチナデシコ	"		1		1	2	
257	ウスベニアオイ	"				2	2	
258	ウスベニチチコグサ	"			1	1	2	
259	オオベニタデ	"			2		2	
260	オニゲシ	"		1		1	2	
261	カミツレ	"			1	1	2	
262	キレハイヌガラシ	"			2		2	
263	キンケイギク	"		1	1		2	
264	クジラグサ	"		2			2	
265	シュウメイギク	"	2				2	
266	シヨクヨウガヤツリ	"			2		2	
267	シロバナシナガワハギ	"			2		2	
268	セイヨウノギリソウ	"	1			1	2	
269	セイヨウヒルガオ	"		1		1	2	
270	セイヨウフウチョウソウ	"			1	1	2	
271	センナリホオズキ	"		1	1		2	
272	ツルノゲイトウ	"		2			2	
273	ノゲイトウ	"	1		1		2	
274	ノヂシャ	"		2			2	
275	ハイニシキソウ	"			2		2	
276	ヒメブタナ	"				2	2	
277	ヒロハノレンリソウ	"				2	2	
278	フウセンカズラ	"				2	2	
279	マツバゼリ	"		2			2	
280	アケボノセンノウ	"				1	1	
281	アメリカアリタソウ	"		1			1	
282	アメリカツノクサネム	"			1		1	
283	アライトツメクサ	"		1			1	
284	エダウチチチコグサ	"		1			1	
285	エノキアオイ	"				1	1	
286	エビスグサ	"			1		1	
287	オオアマナ	"	1				1	
288	オオツルイタドリ	"	1				1	
289	オオホナガアオゲイトウ	"			1		1	
290	オキナアサガオ	"				1	1	
291	オトメフウロ	"	1				1	
292	オハツキガラシ	"			1		1	
293	カナリークサヨシ	"		1			1	
294	キバナバラモンジン	"			1		1	

表 外来種の環境別報告件数 (7)

No	和名	外来順	A(雑木林)	B(河川敷)	C(水田・休耕田・畑)	D(市街地)	報告件数合計	解説頁
295	キレハマメグンバイナズナ	⑤一般外来種つづき				1	1	
296	キンシバイ	"				1	1	
297	クスダマツメクサ	"		1			1	
298	ゲンゲ	"		1			1	
299	コウヤカミツレ	"				1	1	
300	コエンドロ	"			1		1	
301	コゴメギク	"			1		1	
302	コタネツケバナ	"		1			1	
303	コテングクワガタ	"	1				1	
304	コメツブヤエムグラ	"				1	1	
305	サボンソウ	"	1				1	
306	シラゲガヤ	"		1			1	
307	セイヨウジュウニヒトエ	"				1	1	
308	セイヨウヤブイチゴ	"				1	1	
309	タケトアゼナ	"			1		1	
310	テリミノイヌホオズキ	"			1		1	
311	テンニンギク	"				1	1	
312	ナツズイセン	"	1				1	
313	ニオイスミレ	"	1				1	
314	ニガカシュウ	"		1			1	
315	ニシキアオイ	"		1			1	
316	ネズミホソムギ	"			1		1	
317	ノラニンジン	"	1				1	
318	ハイアオイ	"			1		1	
319	ハイミチヤナギ	"		1			1	
320	ハナトラノオ	"		1			1	
321	ハネミギク	"	1				1	
322	バラモンジン	"		1			1	
323	ハリビユ	"			1		1	
324	ヒゲナガスズメノチャヒキ	"				1	1	
325	ヒメハルガヤ	"		1			1	
326	ヒメモロコシ	"			1		1	
327	フユアオイ	"				1	1	
328	ベニカタバミ	"				1	1	
329	マメカミツレ	"				1	1	
330	ムシトリマンテマ	"				1	1	
331	メリケントキンソウ	"		1			1	
332	ユメノシマガヤツリ	"		1			1	
333	ローマカミツレ	"		1			1	
334	アイオオアカウキクサ	"		2			2	
335	マグワ	⑥逸出・栽培・植栽	7	22	7	1	37	
336	シュロ	"	9	1	4	3	17	
337	アブラナ	"		14		1	15	
338	カジノキ	"	1	8	2	2	13	
339	ムラサキツユクサ	"	1	1	5	6	13	
340	センダン	"	3	2	3	5	13	
341	チャノキ	"	7	1	1	1	10	
342	マンリョウ	"	6	1	2	1	10	
343	ナンキンハゼ	"		3	2	5	10	
344	シソ	"	1	3	2	3	9	

表 外来種の環境別報告件数 (8)

No	和名	外来順	A(雑木林)	B(河川敷)	C(水田・休耕田・畑)	D(市街地)	報告件数合計	解説頁
345	サンシキスミレ	⑥逸出・栽培・植栽つづき		2	2	3	7	
346	ヒノキ	〃	6				6	
347	マツバギク	〃			1	4	5	
348	アキノレ	〃		4		1	5	
349	スギ	〃	5				5	
350	ヤツデ	〃	5				5	
351	イヌカタヒバ	〃	2		1	1	4	
352	オモト	〃	2		2		4	
353	コムラサキ	〃	1		1	2	4	
354	ビワ	〃	4				4	
355	オカメザサ	〃	1	1		1	3	
356	ノアサガオ	〃			1	2	3	
357	アジサイ	〃	3				3	
358	ナンテン	〃	2	1			3	
359	コウゾ	〃	2				2	
360	ボタンクサギ	〃			1	1	2	
361	ヒメビジョザクラ	〃			2		2	
362	ソメイヨシノ	〃	2				2	
363	ナツツバキ	〃	2				2	
364	ノウゼンカズラ	〃	1		1		2	
365	フヨウ	〃	2				2	
366	モチノキ	〃	2				2	
367	ヤブツバキ	〃	2				2	
368	カラタチバナ	〃			1		1	
369	オランダカイウ	〃		1			1	
370	カンナ	〃		1			1	
371	コムギ	〃			1		1	
372	セイヨウオダマキ	〃	1				1	
373	ソライロアサガオ	〃			1		1	
374	マツバボタン	〃			1		1	
375	イチイ	〃	1				1	
376	ウバメガシ	〃	1				1	
377	ウメ	〃	1				1	
378	オオムラサキ	〃	1				1	
379	カクレミノ	〃	1				1	
380	キササゲ	〃	1				1	
381	キョウチクトウ	〃				1	1	
382	クスノキ	〃		1			1	
383	クチナシ	〃				1	1	
384	クロマツ	〃	1				1	
385	コヒガンザクラ	〃	1				1	
386	サザンカ	〃				1	1	
387	サツキ	〃	1				1	
388	サルスベリ	〃	1				1	
389	シダレヤナギ	〃		1			1	
390	シャリンバイ	〃	1				1	
391	スイフヨウ	〃	1				1	
392	ソシンロウバイ	〃	1				1	
393	トウカエデ	〃			1		1	
394	ナギイカダ	〃	1				1	

表 外来種の環境別報告件数 (9)

No	和名	外来順	A(雑木林)	B(河川敷)	C(水田・休耕田・畑)	D(市街地)	報告件数合計	解説頁
395	ハクウンボク	⑥逸出・栽培・植栽つづき	1				1	
396	ハコネウツギ	〃	1				1	
397	ヒイラギ	〃	1				1	
398	ポポー	〃	1				1	
399	モモ	〃	1				1	
400	ヤブニツケイ	〃			1		1	
401	レンギョウ	〃	1				1	
	合計		3263	9551	10789	11071	34674	

カテゴリー別報告種数について

3年間の報告件数は34674件であったが、種数でみた場合、報告種数は401種であった。右表は報告種数と報告件数が対比できよう報告件数を再掲している。

外来種カテゴリー	報告種数	同左百分率	報告件数	同左百分率
①緊急対策外来種	8	2.0%	921	2.7%
②重点対策外来種	36	9.0%	5010	14.4%
③その他の総合対策外来種	44	11.0%	6265	18.1%
④産業管理外来種	14	3.5%	1560	4.5%
⑤一般外来種	232	57.9%	20658	59.6%
⑥逸出・栽培・植栽種	67	16.7%	260	0.7%
合計	401	100.0%	34674	100.0%

報告種数は⑤一般外来種が最大で232種であった。つぎが⑥逸出・栽培・植栽種で67種、①～④の生態系被害防止外来種リスト掲載種はまとめて102種であった。

報告種数と報告件数の百分率を比較してみると、①～⑤はいずれの割合も報告種数の方が報告件数を下回っており、⑥だけは報告種数の方が報告件数を大幅に上回っていた。これはマグワなど⑥逸出・栽培・植栽種の報告種数は多かったが、報告件数はいずれもごくわずかであったためである。⑥は野外では増えていないことの現れである。また、①～④の百分率の合計と⑤の百分率の数値を比較すると、報告種数では25.5%:57.9%=1:2.3であるのに対して、報告件数では39.7%:59.6%=1:1.5となった。このことは生態系被害防止外来種リスト掲載種の方が一般外来種に比べて2.3/1.5=1.53倍くらい目立つ(報告しやすい)存在であることを示すものである。

環境別報告件数について

カテゴリー別報告件数についてはすでに述べたが、これを環境別報告件数で並べ替えるとどのようなことがわかるだろうか。次頁の表に環境別に報告件数降順30位までを示す。

全般にいえることは、いずれの環境もセイタカアワダチソウが1位を占めていることである。勢力はやや収まってきているとはいわれるものの環境にとらわれず相変わらずトップの座を占めている。ヒメジョオンも同様に2～4位を占めており、環境にかかわらず普遍的に出現する。コセンダングサも順位がやや下がり6～7位を占めるが普遍的に出現する。

これらに対してユウゲショウはC水田・休耕田・畑とD市街地では2位、B河川敷では3位を占めるがA雑木林では13位となり、環境によって差が生じる。セイヨウタンポポでも同様の傾向があり、ACDで5位または8位を占めるがBでは13位となっている。オオブタクサは全体の順位は17位と低いが、Aで9位、Bで6位、Cで13位と比較的順位が高く、Dでは逆に番外となる。オオブタクサがあればそこは市街地ではないというようなイメージがつけられそうである。

環境別にみてみよう。A雑木林では上位10位の中に全体順位の低いヨウシュヤマゴボウ(全体22位)、ハルジオン(全体18位)がある。

B 河川敷では上位 10 位の中にヘラオオバコ(全体 19 位)、アレチウリ(全体 30 位)、ナガバギンギシ(全体 16 位)がある。アレチウリは全体 30 位なのに河川敷では突出しており河川敷の象徴的存在である。

C 水田・休耕田・畑では上位 10 位の中にノボロギク(全体 20 位)、オニノゲシ(全体 14 位)が入る。

D 市街地ではウラジロチチコグサが上位 10 位の中に食い込むが、ウラジロチチコグサは他環境で 14 位、24 位、22 位にあり、市街地特有の植物にはなりにくい。

環境別 順位	A雑木林		B河川敷		C水田・休耕田・畑		D市街地	
	和名	件数 全体順位	和名	件数 全体順位	和名	件数 全体順位	和名	件数 全体順位
1	セイタカアワダチソウ	155 全1位	セイタカアワダチソウ	426 全1位	セイタカアワダチソウ	390 全1位	セイタカアワダチソウ	395 全1位
2	ヒメジョオン	134 全2位	セイバンモロコシ	348 全7位	ユウゲショウ	385 全3位	ユウゲショウ	379 全3位
3	ヨウシュヤマゴボウ	121 全22位	ヒメジョオン	292 全2位	ハキダメギク	381 全10位	ヒメジョオン	375 全2位
4	オッタチカタバミ	115 全4位	ユウゲショウ	287 全3位	ヒメジョオン	378 全2位	オッタチカタバミ	375 全4位
5	セイウタンポポ	115 全6位	ヘラオオバコ	281 全19位	オッタチカタバミ	349 全4位	ウラジロチチコグサ	332 全13位
6	ハルジオン	111 全18位	オオブタクサ	273 全17位	コセンダングサ	346 全5位	コセンダングサ	301 全5位
7	コセンダングサ	93 全5位	コセンダングサ	270 全5位	ノボロギク	291 全20位	ヒメカシヨモギ	298 全9位
8	イヌムギ	87 全8位	アレチウリ	256 全30位	セイウタンポポ	267 全6位	セイウタンポポ	288 全6位
9	オオブタクサ	77 全17位	オッタチカタバミ	252 全4位	アメリカフウロ	261 全11位	イヌムギ	265 全8位
10	ハキダメギク	72 全10位	ナガバギンギシ	252 全16位	オニノゲシ	260 全14位	セイバンモロコシ	258 全7位
11	シロツメクサ	71 全12位	ムラサキツメクサ	242 全23位	シロツメクサ	251 全12位	ナガミヒナゲシ	239 全26位
12	ヒメカシヨモギ	68 全9位	セイウカラシナ	230 全33位	ヒメカシヨモギ	247 全9位	アメリカオニアザミ	230 全27位
13	ユウゲショウ	66 全3位	セイウタンポポ	227 全6位	オオブタクサ	213 全17位	アメリカフウロ	229 全11位
14	ウラジロチチコグサ	66 全13位	ネズミムギ	222 全15位	セイバンモロコシ	209 全7位	オニノゲシ	227 全14位
15	アメリカフウロ	63 全11位	イヌムギ	215 全8位	ナガバギンギシ	208 全16位	ハキダメギク	225 全10位
16	オニノゲシ	59 全14位	アメリカフウロ	193 全11位	ハルジオン	204 全18位	シロツメクサ	223 全12位
17	ネズミムギ	54 全15位	シロツメクサ	188 全12位	イヌムギ	202 全8位	ネズミムギ	203 全15位
18	オオイヌフグリ	53 全25位	メマツヨイグサ	169 全21位	オオイヌフグリ	201 全25位	ノボロギク	192 全20位
19	ニワウルシ	48 番外	アメリカセンダングサ	152 全24位	アメリカセンダングサ	199 全24位	メマツヨイグサ	191 全21位
20	アメリカセンダングサ	47 全24位	ヒメカシヨモギ	151 全9位	ネズミムギ	197 全15位	ヨウシュヤマゴボウ	187 全22位
21	ナガバギンギシ	44 全16位	オニノゲシ	144 全14位	メマツヨイグサ	185 全21位	ハルジオン	178 全18位
22	メマツヨイグサ	44 全21位	ハルジオン	136 全18位	ウラジロチチコグサ	184 全13位	コニシキソウ	176 全28位
23	コニシキソウ	44 全28位	オオイヌフグリ	128 全25位	コニシキソウ	152 全28位	ヘラオオバコ	165 全19位
24	アメリカイヌホオズキ	43 全32位	ウラジロチチコグサ	119 全13位	アメリカイヌホオズキ	141 全32位	オランダミナグサ	152 全29位
25	ハリエンジュ	42 番外	シマスズメヒエ	112 全34位	ムラサキツメクサ	139 全23位	アメリカイヌホオズキ	151 全32位
26	ヒメオドリコソウ	41 番外	エゾノギンギシ	111 番外	オランダミナグサ	139 全29位	コマツヨイグサ	151 全31位
27	アレチヌスビトハギ	37 番外	キクイモ	109 番外	ヨウシュヤマゴボウ	138 全22位	ナガバギンギシ	148 全16位
28	オランダミナグサ	34 全29位	アレチギンギシ	108 番外	ナガミヒナゲシ	132 全26位	オオキンケイギク	141 番外
29	アメリカオニアザミ	33 全27位	コマツヨイグサ	105 全31位	ヘラオオバコ	131 全19位	チチコグサモドキ	136 番外
30	ノボロギク	31 全20位	ナヨクサフジ	102 番外	コマツヨイグサ	122 全31位	ムラサキカタバミ	132 番外

種ごとの環境別報告件数割合

以下各論で述べる No.1~50 の 50 種について環境別の比較をした。次の表は各種について、報告件数に基づき各 環境ごとの百分率を計算したものである。セルに色の塗りつぶしがあるのは 4 つの環境の中の最大値である。特に青色で塗りつぶしたセルは百分率が 50.0%を超えるセルである。

No	和名	A雑木林	B河川敷	C水田・休耕田・畑	D市街地	合計	報告件数
1	アレチウリ	4.5	62.8	27.3	5.5	100.1	400
2	オオカワヂシャ	2.9	85.6	6.7	4.8	100	104
3	オオキンケイギク	3.6	20.4	30.4	45.6	100	309
4	オオフサモ	0.0	86.0	14.0	0.0	100	57
5	ミズヒマワリ	0.0	95.3	4.7	0.0	100	43
6	アメリカアサガオ	2.2	31.1	26.7	40.0	100	90
7	オオアワダチソウ	29.4	35.3	35.3	0.0	100	17
8	オオブタクサ	11.7	40.6	34.5	13.1	99.9	640
9	オランダガラシ	11.1	51.4	23.6	13.9	100	72
10	キショウブ	11.0	41.5	32.2	15.3	100	118
11	コマツヨイグサ	4.8	24.9	30.5	39.8	100	397
12	シナダレスズメガヤ	6.8	22.4	28.3	42.4	99.9	205
13	セイトカアワダチソウ	10.1	28.1	31.9	29.9	100	1366
14	セイヨウタンポポ	11.5	23.2	30.3	35.0	100	897
15	ニワウルシ	18.0	26.8	25.4	29.8	100	228
16	ノハカタカラクサ	17.1	19.5	8.5	54.9	100	82
17	ヒメマツバボタン	3.2	16.1	9.7	71.0	100	31
18	ホテイアオイ	7.1	67.9	10.7	14.3	100	28
19	マメアサガオ	4.8	41.3	31.0	23.0	100.1	126
20	マルバルコウ	4.8	20.6	46.1	28.5	100	228
21	メリケンガヤツリ	0.0	78.2	12.7	9.1	100	55
22	アメリカオニアザミ	7.3	14.4	25.3	53.0	100	438
23	アメリカセンダングサ	9.2	26.7	39.3	24.8	100	521
24	アレチヌスビトハギ	15.7	35.7	29.8	18.7	99.9	235
25	エゾノギシギシ	9.5	39.4	29.2	22.0	100.1	264
26	オオオナモミ	2.0	38.3	51.0	8.7	100	149
27	シマスズメノヒエ	6.9	28.1	32.1	32.9	100	377
28	セイバンモロコシ	2.7	39.7	26.6	30.8	99.8	839
29	セイヨウカラシナ	2.1	58.5	24.9	14.6	100.1	378
30	タカサゴユリ	8.4	5.3	19.8	66.4	99.9	131
31	ナガバギシギシ	5.8	37.9	31.6	24.4	99.7	652
32	ハルシャギク	4.9	28.7	30.1	36.4	100.1	143
33	ヒメジョオン	10.7	22.8	32.1	34.3	99.9	1179
34	ヒメツルソバ	4.3	10.0	11.4	74.3	100	140
35	ムシトリナデシコ	6.2	13.9	33.0	46.9	100	194
36	メリケンカルカヤ	11.2	16.9	32.6	39.3	100	89
37	カモガヤ	15.1	30.2	27.9	26.7	99.9	86
38	ナヨクサフジ	4.9	56.6	31.3	7.1	99.9	182
39	ネズミムギ	6.7	33.3	29.3	30.8	100.1	676
40	ハリエンジュ	19.7	35.4	23.7	21.2	100	198
41	ホソムギ	4.2	35.6	37.2	23.0	100	239
42	アイノコセイヨウタンポポ	10.1	20.6	31.5	37.8	100	238
43	ハナニラ	19.2	16.7	21.8	42.3	100	78
44	ヤナギハナガサ	4.5	20.2	22.5	52.8	100	89
45	フランスギク	12.1	21.2	25.8	40.9	100	66
46	オニウシノケグサ	6.8	35.6	28.8	28.8	100	59
47	オッタチカタバミ	9.1	19.5	33.9	37.5	100	1091
48	ユウゲショウ	5.6	22.3	36.0	36.1	100	1117
49	コセンダングサ	8.4	24.2	38.1	29.3	100	1010
50	アメリカフウロ	7.2	22.5	35.4	34.9	100	746

青色表示は当該種の最適環境を示している。

青色表示の大きい数値を拾うと降順にミズヒマワリ河川敷95.3%、オオフサモ河川敷86.0%、オオカワヂシャ河川敷85.6%、メリケンガヤツリ河川敷78.2%、ヒメツルソバ市街地74.3%、ヒメマツバボタン市街地71.0%などであった。

改めて当該環境の特徴となる外来種を選別すると次のようになる。

まずA雑木林には、該当がない。

B河川敷では降順で、ミズヒマワリ、オオフサモ、オオカワヂシャ、メリケンガヤツリ、ホテイアオイ、アレチウリ、セイヨウカラシナ、ナヨクサフジ、オランダガラシがある。

C水田・休耕田・畑では、オオオナモミがある。

D市街地では降順で、ヒメツルソバ、ヒメマツバボタン、タカサゴユリ、ノハカタカラクサ、アメリカオニアザミ、ヤナギハナガサがある。

(2)種別調査結果

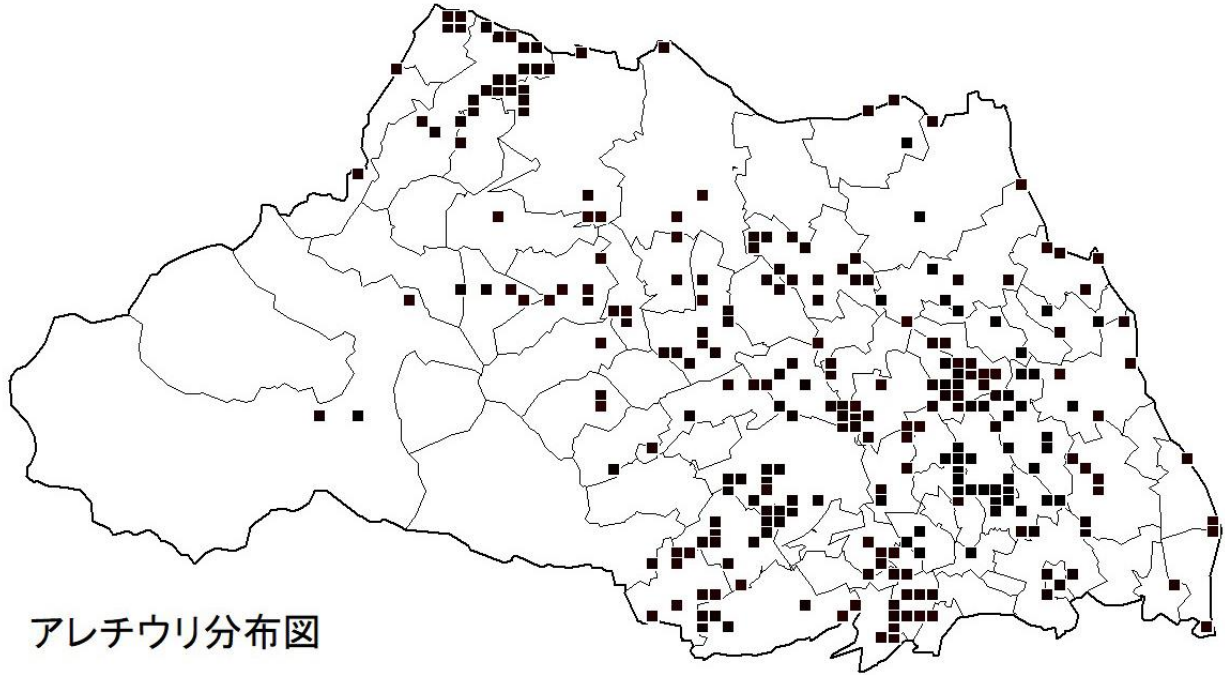
No	APG科名	和名	カテゴリー	ランク	解説頁
1	(ウリ科)	アレチウリ	特定外来生物・緊急対策外来種	1位	植物16
2	(オオバコ科)	オオカワヂシャ	特定外来生物・緊急対策外来種	1位	植物18
3	(キク科)	オオキンケイギク	特定外来生物・緊急対策外来種	1位	植物20
4	(アリノトウグサ科)	オオフサモ	特定外来生物・緊急対策外来種	1位	植物22
5	(キク科)	ミズヒマワリ	特定外来生物・緊急対策外来種	1位	植物24
6	(ヒルガオ科)	アメリカアサガオ	重点対策外来種	1位	植物26
7	(キク科)	オオアワダチソウ	重点対策外来種	1位	植物28
8	(キク科)	オオブタクサ	重点対策外来種	1位	植物30
9	(アブラナ科)	オランダガラシ	重点対策外来種	1位	植物32
10	(アヤメ科)	キショウブ	重点対策外来種	1位	植物34
11	(アカバナ科)	コマツヨイグサ	重点対策外来種	1位	植物36
12	(イネ科)	シナダレスズメガヤ	重点対策外来種	1位	植物38
13	(キク科)	セイタカアワダチソウ	重点対策外来種	1位	植物40
14	(キク科)	セイヨウタンポポ	重点対策外来種	1位	植物42
15	(ニガキ科)	ニワウルシ	重点対策外来種	1位	植物44
16	(ツククサ科)	ノハカタカラクサ	重点対策外来種	1位	植物46
17	(スベリヒユ科)	ヒメマツバボタン	重点対策外来種	1位	植物48
18	(ミズアオイ科)	ホテイアオイ	重点対策外来種	1位	植物50
19	(ヒルガオ科)	マメアサガオ	重点対策外来種	1位	植物52
20	(ヒルガオ科)	マルバルコウ	重点対策外来種	1位	植物54
21	(カヤツリグサ科)	メリケンガヤツリ	重点対策外来種	1位	植物56
22	(キク科)	アメリカオニアザミ	その他の総合対策外来種	1位	植物58
23	(キク科)	アメリカセンダングサ	その他の総合対策外来種	1位	植物60
24	(マメ科)	アレチヌスビトハギ	その他の総合対策外来種	1位	植物62
25	(タデ科)	エゾノギシギシ	その他の総合対策外来種	1位	植物64
26	(キク科)	オオオナモミ	その他の総合対策外来種	1位	植物66
27	(イネ科)	シマスズメノヒエ	その他の総合対策外来種	1位	植物68
28	(イネ科)	セイバンモロコシ	その他の総合対策外来種	1位	植物70
29	(アブラナ科)	セイヨウカラシナ	その他の総合対策外来種	1位	植物72
30	(ユリ科)	タカサゴユリ	その他の総合対策外来種	1位	植物74
31	(タデ科)	ナガバギシギシ	その他の総合対策外来種	1位	植物76
32	(キク科)	ハルシャギク	その他の総合対策外来種	1位	植物78
33	(キク科)	ヒメジョオン	その他の総合対策外来種	1位	植物80
34	(タデ科)	ヒメツルソバ	その他の総合対策外来種	1位	植物82
35	(ナデシコ科)	ムシトリナデシコ	その他の総合対策外来種	1位	植物84
36	(イネ科)	メリケンカカヤ	その他の総合対策外来種	1位	植物86
37	(イネ科)	カモガヤ	産業管理外来種	1位	植物88
38	(マメ科)	ナヨクサフジ	産業管理外来種	1位	植物90
39	(イネ科)	ネズミムギ	産業管理外来種	1位	植物92
40	(マメ科)	ハリエンジュ	産業管理外来種	1位	植物94
41	(イネ科)	ホソムギ	産業管理外来種	1位	植物96
42	(キク科)	アイノコセイヨウタンポポ	産業管理外来種	3位	植物98
43	(ヒガンバナ科)	ハナニラ	その他の総合対策外来種	1位	植物100
44	(クマツヅラ科)	ヤナギハナガサ	その他の総合対策外来種	1位	植物102
45	(キク科)	フランスギク	その他の総合対策外来種	1位	植物104
46	(イネ科)	オニウシノケグサ	産業管理外来種	1位	植物106
47	(カタバミ科)	オツタチカタバミ	一般外来種	2位	植物108
48	(アカバナ科)	ユウゲショウ	一般外来種	2位	植物110
49	(キク科)	コセンダングサ	一般外来種	2位	植物112
50	(フウロソウ科)	アメリカフウロ	一般外来種	3位	植物114
51	(キク科)	ナルトサワギク	特定外来生物・緊急対策外来種	1位	植物116
52	(ヒルガオ科)	アメリカネナシカズラ	一般外来種	1位	植物117
53	(クマツヅラ科)	アレチハナガサ	一般外来種	1位	植物117
54	(カタバミ科)	オオキバナカタバミ	一般外来種	1位	植物118
55	(イネ科)	オオクサキビ	一般外来種	1位	植物118
56	(イネ科)	キシウスズメノヒエ	一般外来種	1位	植物119
57	(タデ科)	シャクチリソバ	一般外来種	1位	植物119
58	(タデ科)	ツルドクダミ	一般外来種	1位	植物120
59	(イネ科)	ハルガヤ	一般外来種	1位	植物120
60	(アヤメ科)	ヒメヒオウギズイセン	一般外来種	1位	植物121
61	(ヒルガオ科)	ホシアサガオ	一般外来種	1位	植物121
62	(イネ科)	アメリカスズメノヒエ	産業管理外来種	1位	植物122
63	(イネ科)	オオアワガエリ	産業管理外来種	1位	植物122
64	(イネ科)	ナギナタガヤ	産業管理外来種	1位	植物123

個別に調査結果を記述する。今回の調査において、植物の調査対象種1位は59種、2位17種、3位不特定であった。ここでは1位59種、2位3種、3位1種について記載する。その他の報告件数の少ない種については、個別の記述を割愛する。

記述内容は分布情報、環境別報告件数、種の概要、生活段階の月変化、群落の大きさ・広がり及び当該種の象徴である。記述した種は左表に掲載する64種である。

記述は順不同である。報告件数の多い種は前半に、報告件数の少ない種は概略にとどめ後半に配置した。

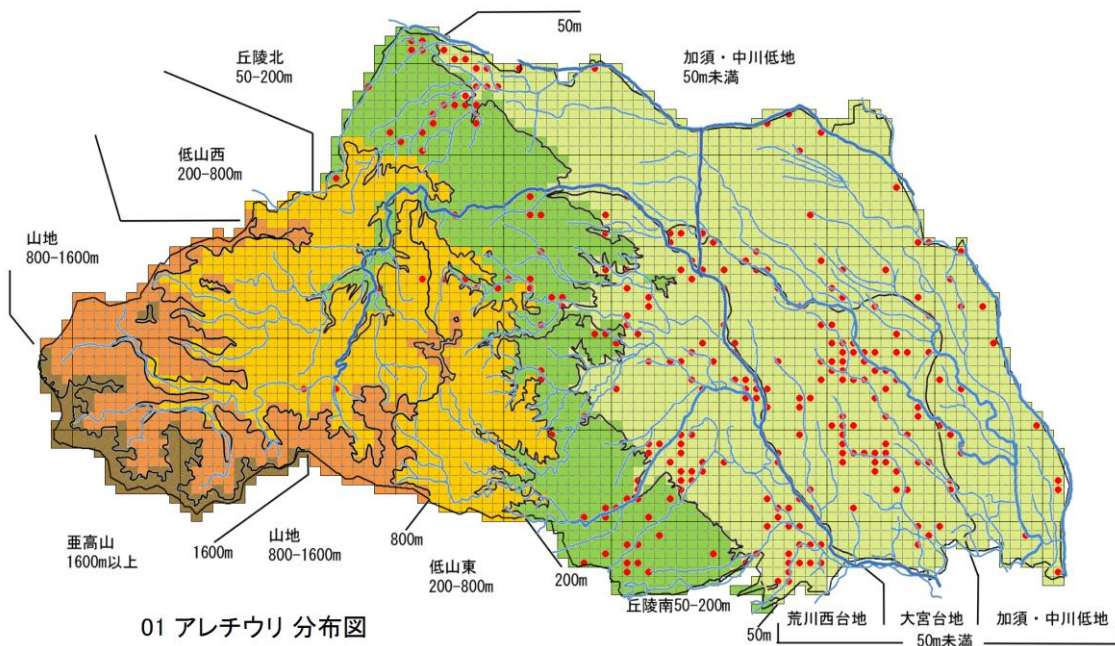
1 アレチウリ(ウリ科) *Sicyos angulatus* 特定外来生物・緊急対策外来種



アレチウリ分布図

分布状況

3年間の調査では、大宮台地、荒川西台地、丘陵南、丘陵北で多く報告されている。河川に沿って群落が成立している。埼玉県植物誌1998によれば、秩父地方山岳地帯は少ないものの、ほぼ県内全域



01 アレチウリ 分布図

に分布している。県レッドデータブック 2011 の調査においてもほぼ全域分布となっている。今回の調査では埼玉県全 54 区画中 36 区画からの報告があり、分布状況はほぼ変わらないようだ。

アレチウリ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	18	4.5
河川敷	B	251	62.8
水田・休耕田・畑	C	109	27.3
市街地	D	22	5.5
合計		400	100.1

環境別報告件数 400 件の報告があった。

生育地は河川敷が圧倒的に多く 62.8%を占める。河川敷に広がったアレチウリは他の植物を完全に被陰する。次いで水田・休耕田・畑が 27.3%。雑木林、市街地の報告は少ない。分布状況から考えてみると、つるを伸ばし巨

大な生育をするためには、河川敷や荒地、畑など光を独占できる開けた環境が好適地と言える。

種の概要 茎はつるで荒い毛を密生し巻きひげで他物に絡まる。花は黄白色。果実は長卵形の液果が

数個集まって金平糖のように見える。河原の泥地や土手でつるを伸ばして旺盛な成長で大群落を形成し、膨大な種子を生産する難防除雑草である。種子は休眠性を持っており、自然環境による休眠打破は個々の種子によって大きく異なる。そのため一斉駆除が困難である。

アレチウリ		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1							0	
2							0	
3							0	
4	1	1					2	
5	13	19	1	1			34	
6	7	68	2	3	2		82	
7	9	58	7	5	2		81	
8		17	5	6	3		31	
9		15	31	66	23		135	
10	3	11	32	66	69	4	185	
11	2	8	3	12	18	8	51	
12		2			3	5	10	
合計	35	199	81	159	120	17	611	

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

生活段階の月変化 幼植物は

4-11月に見られる。つぼみ・

開花・結実が多いのは9-10月で旺盛な生育期といえる。

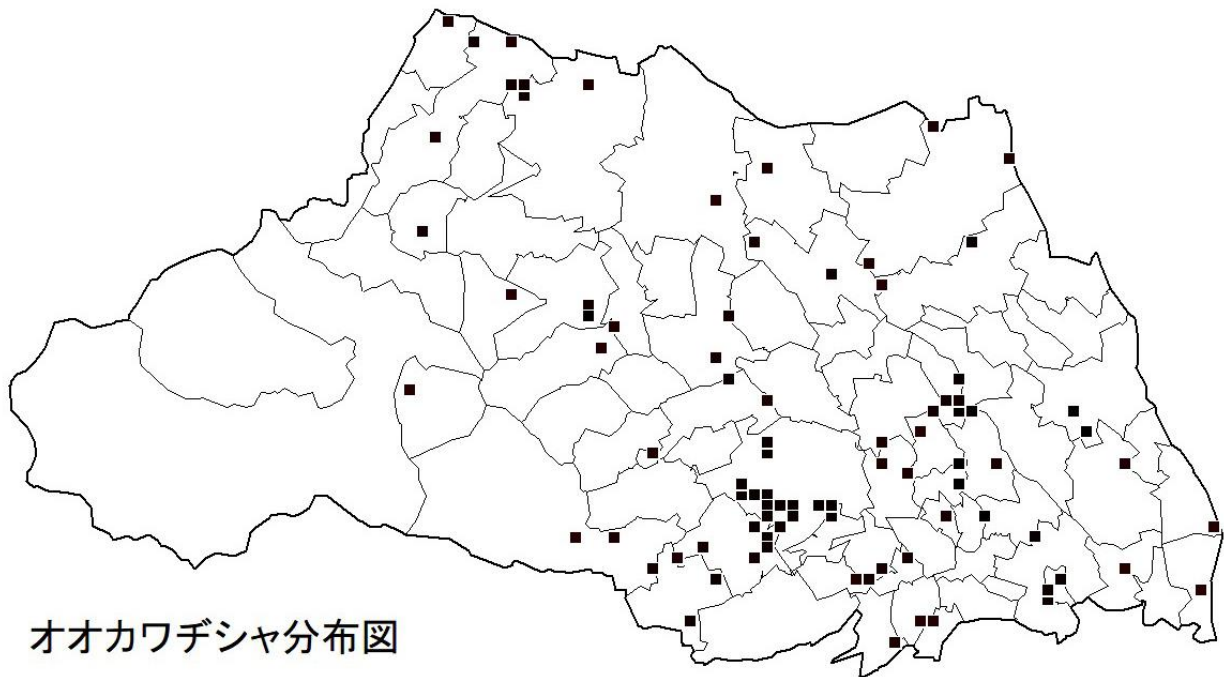
アレチウリ		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
a-fは株 g-lはm ²	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
1													0
2													0
3													0
4			1										1
5	2	5	11	3	1	4			3	1		1	31
6	6	9	31	15	2				1	6		4	74
7	5	3	15	16	11	3			2	4	1	5	65
8	1	4	7	6	2	1			1	1	3		26
9	7	10	16	16	8	1			4	4	8	6	80
10	4	10	24	14	9	4			1	7	9	9	91
11		4	6	5				1	1	1	3	6	27
12			2									3	5
合計	25	45	113	75	33	13	0	1	13	24	24	34	400

群落の大きさ・広がり 大きさは10-99株が一般的だが株数がそれより多い場合も普通に見られる。群落面積は100 m²以上。

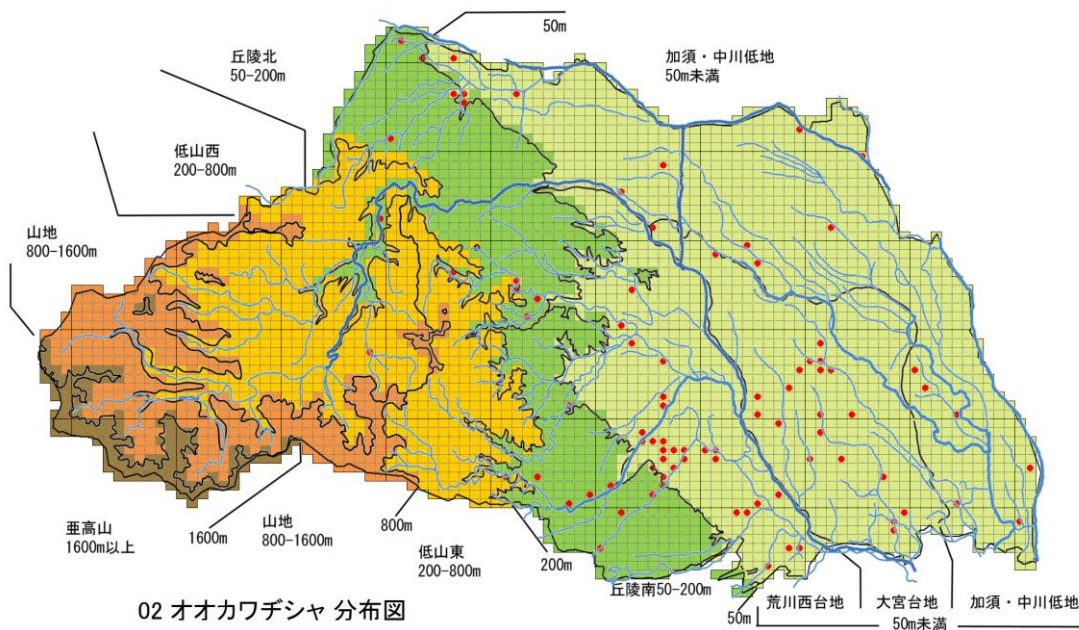
当該種の消長 1952年、静岡県で見いだされた。埼玉県の初出は1972年、川越市で記録された。本種は多くの光を要求する種で、あらゆるものを覆って広がる。覆われた一般野生植物や一般作物はその勢いが急速に減衰し、開花や結実に至ることなく枯死する例が多い。



2 オオカワヂシャ(オオバコ科) *Veronica anagallis-aquatica* 特定外来生物・緊急対策外来種



オオカワヂシャ分布図



02 オオカワヂシャ 分布図

分布状況

3年間の調査では大宮台地、荒川西台地、丘陵南で多く確認されている。丘陵北、低山東でも確認されている。河川に沿って群落が成立している。

埼玉県植物誌1998では、秩父、寄

居・川本・熊谷・吹上・戸田、すなわち荒川沿いで確認されている。県レッドデータブック2011では入間川、利根川沿いでも確認された。今回の調査では全埼玉区54画中27区画で報告があり、少しずつ分布は広がっているようだ。

オオカワヂシャ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	3	2.9
河川敷	B	89	85.6
水田・休耕田・畑	C	7	6.7
市街地	D	5	4.8
合計		104	100

環境別報告件数 報告件数は104件である。生育地は河川敷の報告が圧倒的に多く85.6%を占める。残りは水田・休耕田・畑、市街地、雑木林の順で見られるが僅かである。

種の概要 地中を横走する根茎から直立する茎を伸ばす。カワヂシャにくらべ、本種は大柄で目立ち、

オオカワヂシャ		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1							0	
2							0	
3							0	
4		3	4	15	3		25	
5		3	17	57	22	1	100	
6		1	5	17	7	1	31	
7		1					1	
8		2	1	1			4	
9		1		1			2	
10	1						1	
11				1	1		2	
12		1	1	1			3	
合計	1	12	28	93	33	2	169	

花の色彩も淡青色でメリハリがある。本種は葉の鋸歯が目立たず全縁に見えるのも区別点である。近年在来種のカワヂシャと本種が自然交雑したホナガカワヂシャという雑種が見られるようになった。

生活段階の月変化 つぼみ・開花・結実は4-6月に集中して見られる。10月に幼植物が見られる。このまま越冬するということが。

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

群落の大きさ・広がり 株数の大きさは10-99株が一般的でそれより一段少ない場合と多い場合が普通に見られる。群落面積では100㎡以下である。

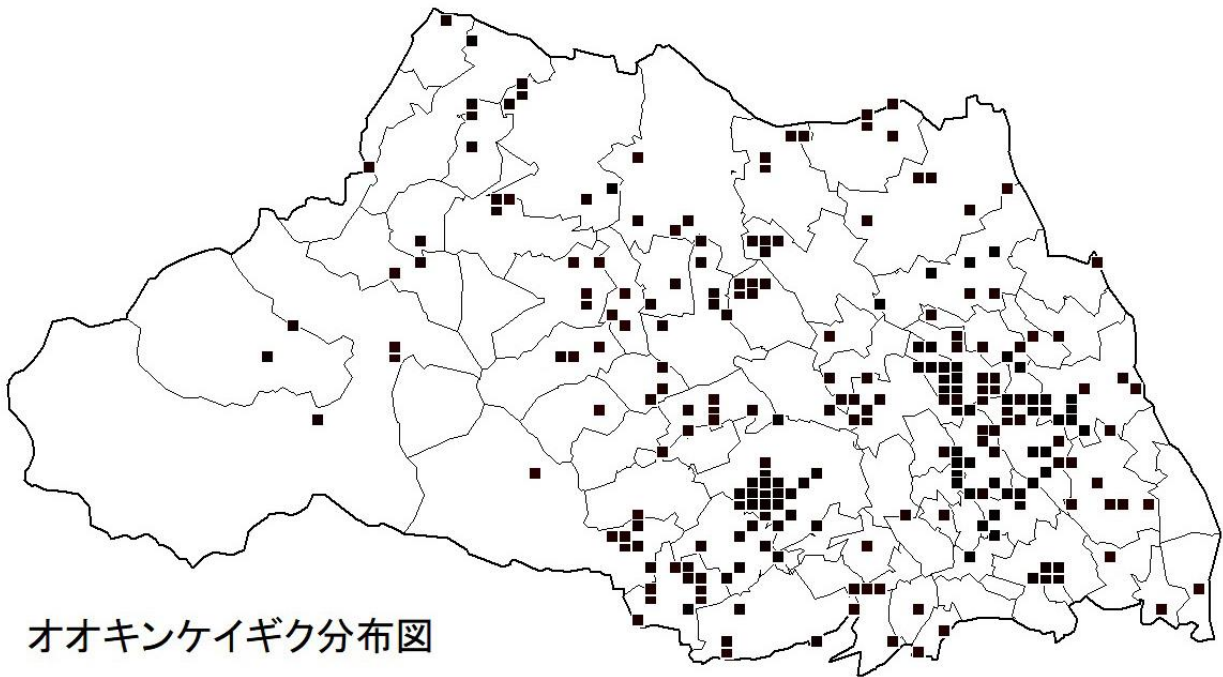
オオカワヂシャ		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計	
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l		
	a-fは株	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05㎡未満	0.25㎡未満	1㎡未満	10㎡未満	100㎡未満	100㎡以上	
1														0
2														0
3														0
4		6	3	5	1									15
5		2	7	24	17	2				2	6			60
6			7	9	1	1				1				19
7			1											1
8			1	1	1									3
9			1	1										2
10				1										1
11				1										1
12		1		1										2
合計		9	20	43	20	3	0	0	0	0	3	6	0	104

当該種の消長

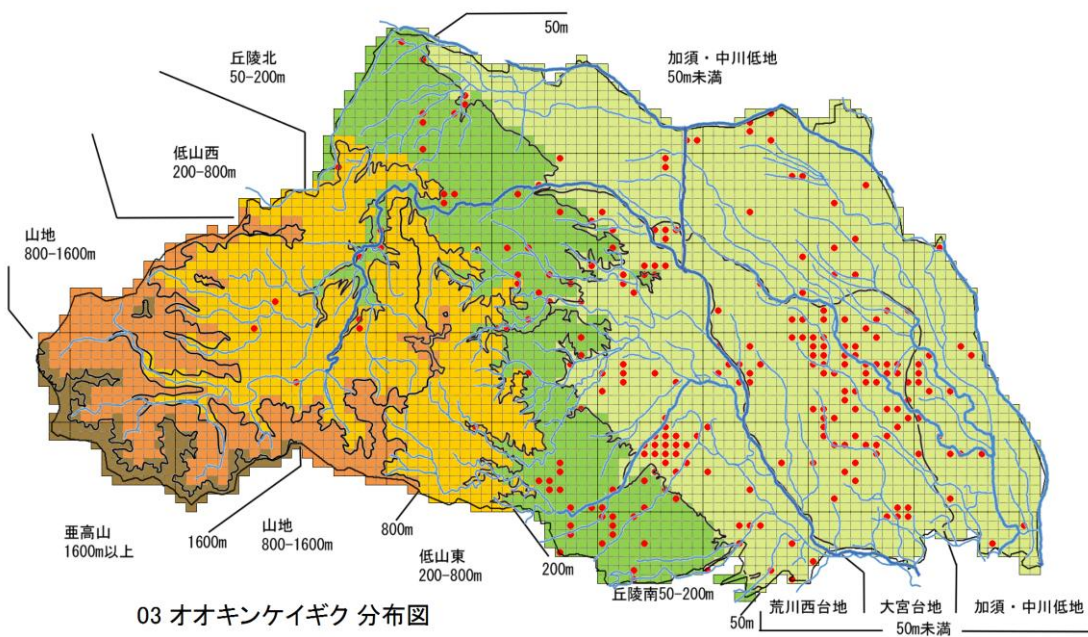
1867年、神奈川県で確認された。侵入経路等のいきさつは明らかでない。埼玉では1998年時点で荒川沿いに確認され、その後20年間に全県的な広がりを見せたと考えられる。それは県のレッドデータブック2011の調査からも裏付けられる。今回の調査では利根川沿いの市町村や、秩父児玉地域の報告はごくわずかであった。



3 オオキンケイギク(キク科) *Coreopsis lanceolata* 特定外来生物・緊急対策外来種



オオキンケイギク分布図



03 オオキンケイギク 分布図

分布状況

3年間の調査では亜高山を除く県全域に分布することがはっきりした。県南部の都県境でも報告があった。埼玉県全54区画中35区画から報告があった。

埼玉県植物誌1998に

よれば秩父・両神・朝霞の限定的分布であった。県レッドデータブック2011の調査によれば比企郡と利根川沿いを除きほぼ県の全域で確認された。

オオキンケイギク			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	11	3.6
河川敷	B	63	20.4
水田・休耕田・畑	C	94	30.4
市街地	D	141	45.6
合計		309	100

環境別報告件数 報告件数は309件であった。最も報告件数の多い環境は市街地の45.6%であった。次いで、水田・休耕田・畑30.4%、河川敷20.4%、雑木林にも分布を広げており環

境を選ばない傾向が強い。ただし、雑木林は例外のようでほとんど現れない。

オオキンケイギク		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1							0	
2							0	
3							0	
4			1	4	1		6	
5		6	28	113	10		157	
6			30	119	36	1	186	
7		2	5	29	15	4	55	
8			1	6	5		12	
9		2		1	2		5	
10	2	2		1	1		6	
11	2	1		1	1	1	6	
12		6					6	
合計	4	19	65	274	71	6	439	

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

種の概要 本種の生活史は約1年半の長さになる。全体の感じはハルシャギクに似る。花の色は本種が黄色一色であるのに対し、ハルシャギクのそれは黄色と紫褐色がモザイク状となるので明瞭に区別できる。本種の根生葉は長い柄があり大きく1回羽状深裂し、ハルシャギクのそれは細かく2回羽状深裂する。茎葉も類似するが、根生葉と同様の特徴があり、両者の区別は容易である。

生活段階の月変化 幼植物は10月に見られ冬を越しているようだ。つぼみ・開花・結実は4-7月に見られる。5-6月が最も旺盛な成長を見せているが、同時に凋落枯死の傾向も見られる。

群落の大きさ・広がり

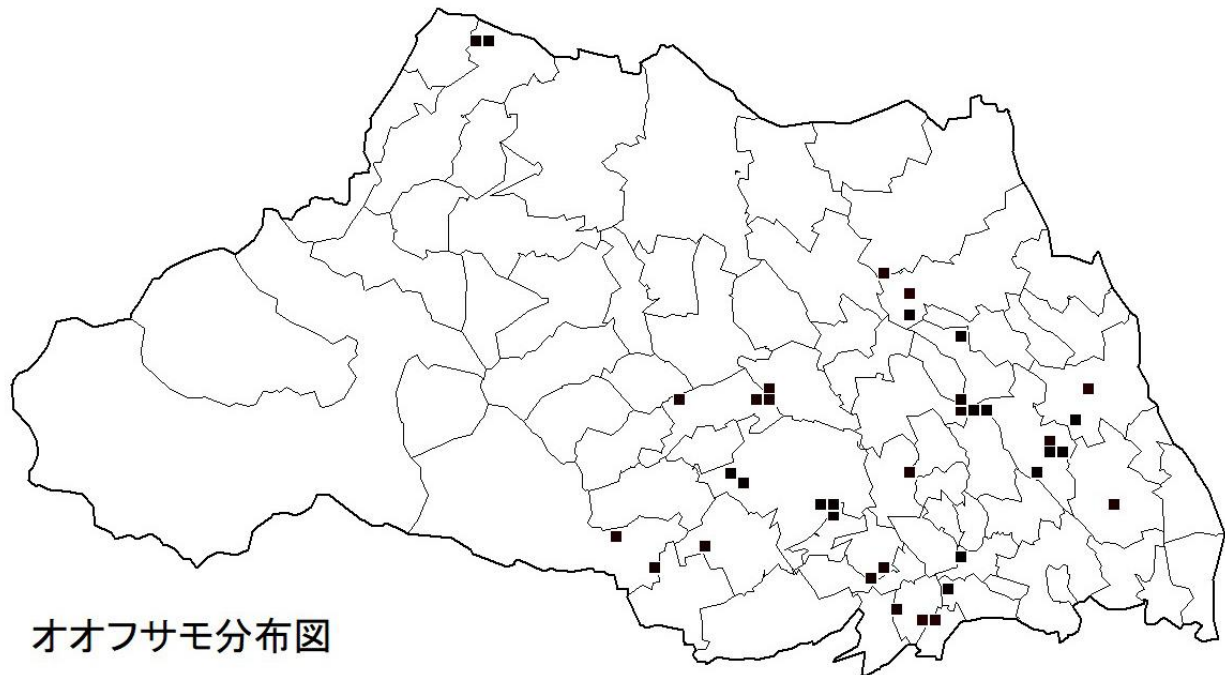
株数の大きさは10-99株が一般的でそれより一段少ない場合と多い場合が普通に見られる。群落面積の報告では10㎡未満が一般的である。

オオキンケイギク		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
a-fは株 g-lは㎡	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05㎡未満	0.25㎡未満	1㎡未満	10㎡未満	100㎡未満	100㎡以上	
1													0
2													0
3													0
4			3	1									4
5	9	17	57	22	2	5				6	2	2	122
6	17	16	67	14	7	4							125
7	1	5	18	5	2	1							32
8		2	2							2			6
9			3		1								4
10	1	1	2							1			5
11		2	2	1									5
12	1	2	2	1									6
合計	29	45	156	44	12	10	0	0	2	7	2	2	309

当該種の消長 明治中期に栽培品として導入されが、その後逸出して野生化し、現状は無管理状態になっている。県内では1998年代に限定的な分布であったが、その後急激に分布範囲を広げ2011年代には全県分布となった。今回の調査は引き続き全県分布を維持している。広く野生化し河川敷は基より道路沿いなど環境を選ばず分布を広げているようだ。



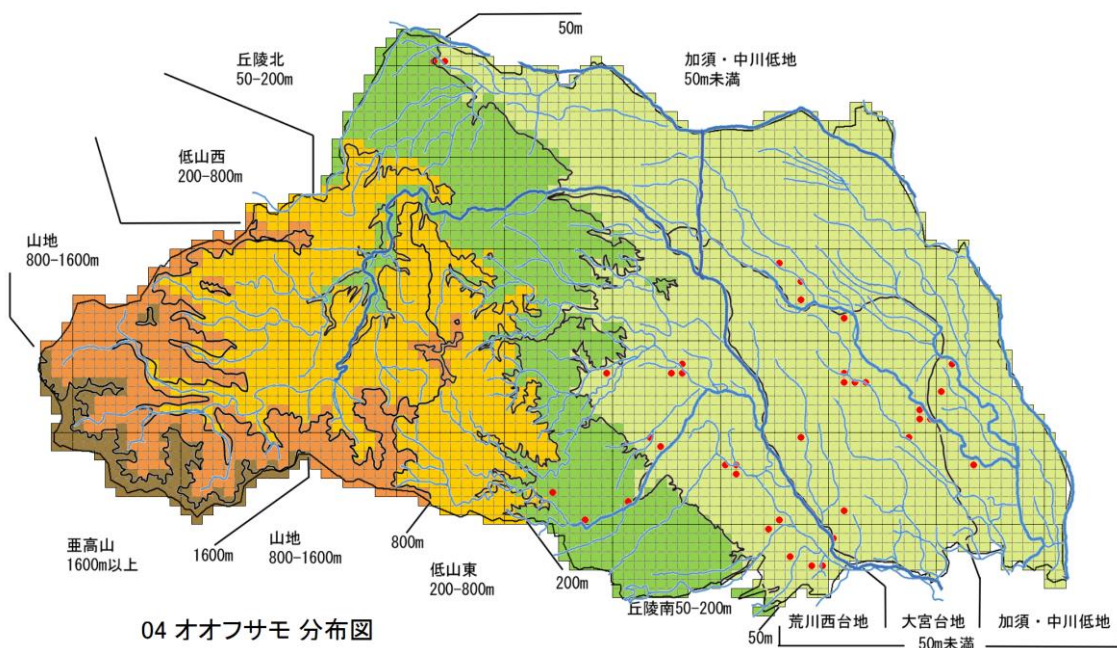
4 オオフサモ(アリトウグサ科) *Myriophyllum aquaticum* 特定外来生物・緊急対策外来種



オオフサモ分布図

分布状況

3年間の調査では加須中川低地、大宮台地、丘陵南、丘陵北の報告があった。河川に沿って群落が成立している。今回の調査では埼玉全54区画中14区画の報告



04 オオフサモ 分布図

があった。

埼玉県植物誌 1998 によれば庄和・岩槻・八潮の限定的分布であった。県レッドデータブック 2011 の調査で羽生・鷲宮・菖蒲・上尾・川越・狭山・飯能での確認が加わった。3年間の調査で見ると限りでは低山地帯 200mより高い環境ではまだ確認されていない。

オオフサモ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0.0
河川敷	B	49	86.0
水田・休耕地・畑	C	8	14.0
市街地	D	0	0.0
合計		57	100

環境別報告件数 57 件の報告があった。生育地は河川敷の報告が 86%と圧倒的に多く、水田・休耕地・畑にも報告があるが、いずれも水路沿いである。市街地、雑木林での確認は無い。

種の概要 水辺の植物である。中小河川や湖沼の縁に繁茂する。水流の緩やかなところに広がる傾向

オオフサモ		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1		1				1	2	
2							0	
3							0	
4		1					1	
5		11		2		2	15	
6		7					7	
7		10					10	
8		4					4	
9		6					6	
10		8				1	9	
11		3					3	
12		4					4	
合計	0	55	0	2	0	4	61	

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

生活段階の月変化 生活段階としては、幼植物をみることはない。成葉だけの状態は2-3月以外いつでも確認できる。開花は5月に確認されているが、本種は年間を通して花を見ることはまれである。
群落の大きさ・広がり 株数の規模は10-99株が一般的で、10 m²位の広がりを見せる。

オオフサモ		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
a-fは株 g-lはm ²	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
1					1								1
2													0
3													0
4			1										1
5		1	3	1				1	2	3	1	1	13
6			3	1	1					1		1	7
7		2		2	1				2	2	1		10
8			1		1					2			4
9		1	1	1	1					1		1	6
10			2	1						3	2		8
11			1						1	1			3
12			2							2			4
合計	0	4	14	6	5	0	0	1	5	15	4	3	57

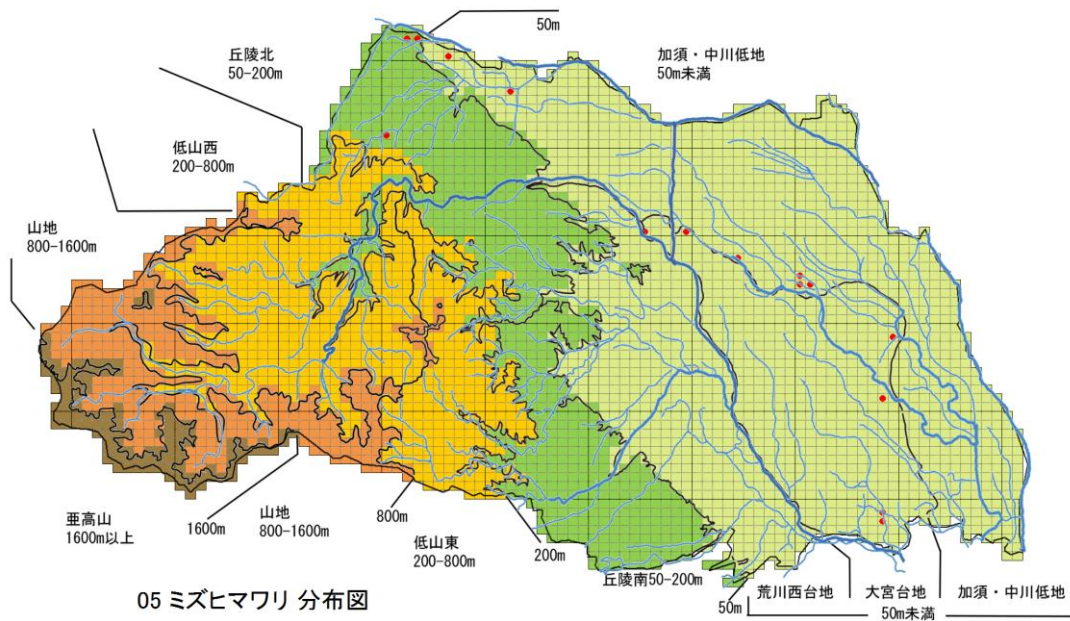
当該種の消長 大正時代に観賞用の水草として導入され逸出し全国的に野生化したという。埼玉県では1998年代ごく限定的であったが、その後急激に分布を広げたといえる。2010年ころは、遠目にきれいに見えることから移植し栽培している事例も見受けられ、まだ珍しい存在であった。栄養繁殖で増えるので川の下流域での増殖には気をつけなければならない。



5 ミズヒマワリ(キク科) *Gymnocoronis spilanthoides* 特定外来生物・緊急対策外来種



ミズヒマワリ分布図



05 ミズヒマワリ 分布図

分布状況

3年間の調査では加須中川低地、大宮台地、丘陵北で確認されている。河川に沿って群落が成立している。埼玉県全54区画中8区画から報告があった。

埼玉県植物誌1998によれば県北部の

本庄・熊谷・妻沼と、県東部の蓮田・岩槻区で記録がある。さらに県レッドデータブック2011の調査では熊谷・久喜・幸手・宮代で確認されている。全部まとめると高崎線以北以東に分布していることになる。

ミズヒマワリ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0.0
河川敷	B	41	95.3
水田・休耕田・畑	C	2	4.7
市街地	D	0	0.0
合計		43	100

環境別報告件数 報告件数 43件でありデータ不足は否めないが、95.3%が河川敷での分布が圧倒的に多い。水田・休耕田・畑でもわずかながら報告がある。市街地、雑木林の報告はない。川沿いに生育していると考えられる。

種の概要 河川・池沼の端に多く生育する。浅瀬では水面を覆うように広がっていく。とくに流水の

ミズヒマワリ		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1							0	
2							0	
3							0	
4							0	
5		5		2			7	
6		1	1	1	1		4	
7		1	1	1			3	
8		1					1	
9				2			2	
10		2		2	1		5	
11		5		20	1		26	
12							0	
合計	0	15	2	28	3	0	48	

弱いところではその成長が著しい。栄養繁殖が極めて旺盛でちぎれた茎葉から容易に再生できるという。

生活段階の月変化 種子から芽生える幼植物を見つけるのは困難で、もともとあった親株から茎を横に伸ばし、葉は3-11月の長期間にわたって観察できる。開花は5-11月に見られる。

群落の大きさ・広がり

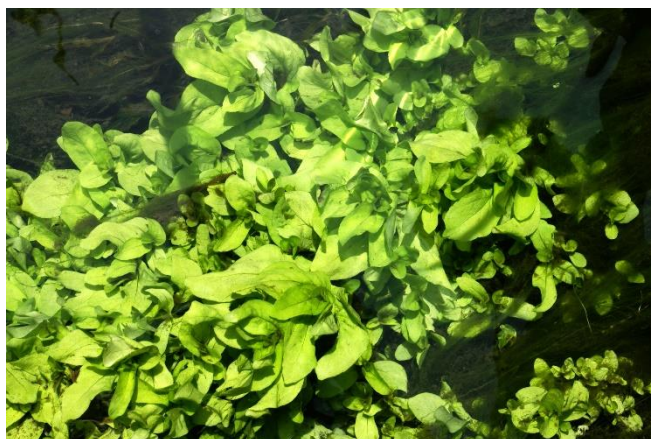
大きさは株数では 10-99 株

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

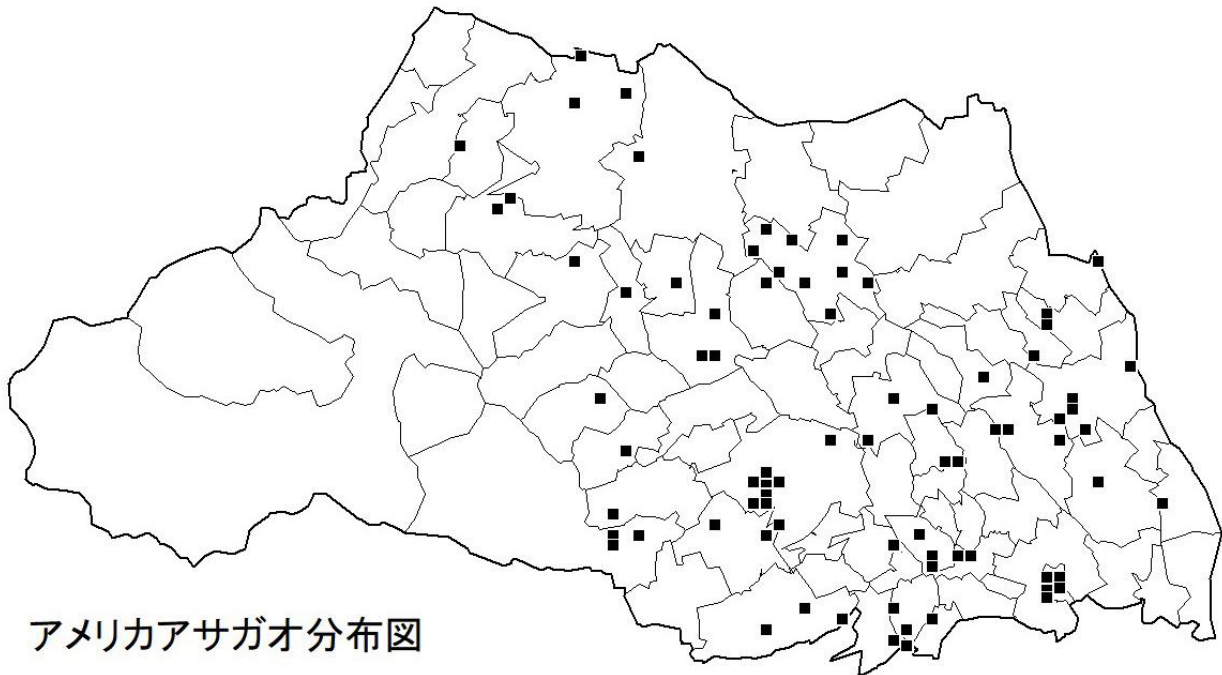
が一般的である。群落面積の報告では 10 m²未満が一般的といえる。

ミズヒマワリ		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
a-fは株 g-lはm ²	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
1													0
2													0
3													0
4													0
5					2	1			1	2	1		7
6		1										1	2
7				1						1			2
8				1									1
9				1						1			2
10	1	1		1							1		4
11									6	19			25
12													0
合計	1	2	0	4	2	1	0	0	7	23	2	1	43

当該種の消長 1995年、豊橋市の河川に定着したのが最初の確認とされる。その後関東から近畿まで太平洋沿岸に分布が拡大している。しかし、埼玉県では報告が多くない。2006年、県内で発見され当初ヌマダイコンではないかと疑われたが、その後の精査で本種と確認された。現階で分布は限定的であるといわざるを得ない。



6 アメリカサガオ(ヒルガオ科) *Ipomoea hederacea* 重点対策外来種

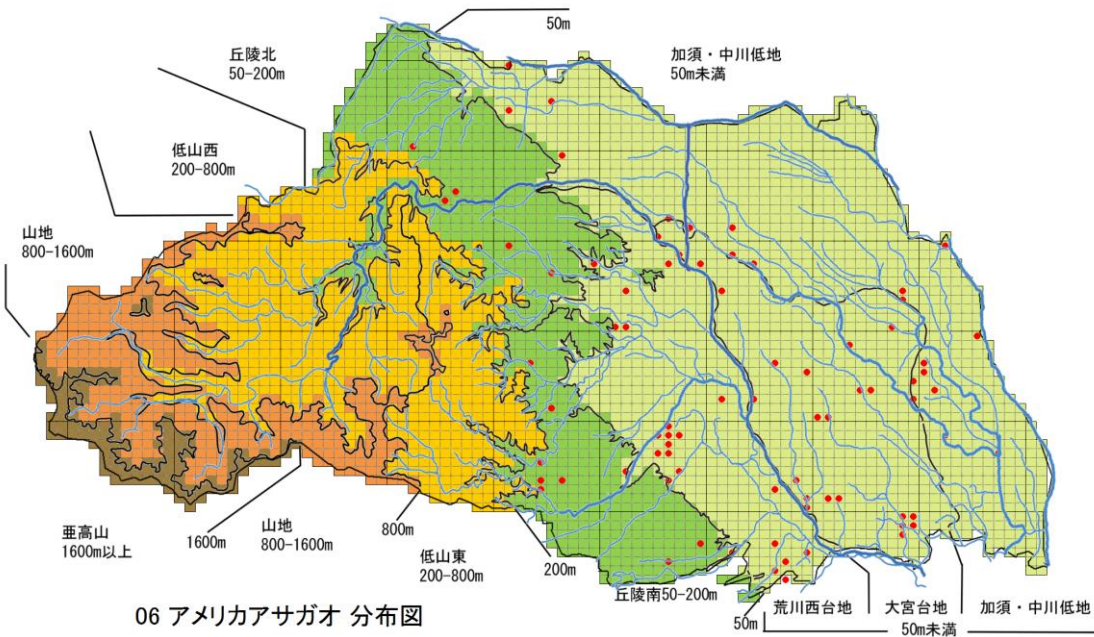


アメリカサガオ分布図

分布状況

3年間の調査では、丘陵帯南北以東の全域で確認された。埼玉県全54区画中23区画から報告があった。

埼玉県植物誌1998の記録によれば児玉郡一帯・行田・羽生・加須、及び川越・見沼区・緑区で記録がある。



06 アメリカサガオ 分布図

埼玉県植物誌1998 発刊以後、秩父・熊谷・三郷が追加された。県レッドデータ2011の調査で入間・幸手・越谷・草加が記録された。

アメリカサガオ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	2	2.2
河川敷	B	28	31.1
水田・休耕田・畑	C	24	26.7
市街地	D	36	40.0
合計		90	100

環境別報告件数 90件の報告があった。市街地で40%、河川敷31.1%、次いで水田・休耕田・畑、雑木林となる。いろいろな環境で他物に絡み、這い上がっていると考えられる。

種の概要 日向を好み、絡みつくものをみな覆い隠してしまう。がく片は鋭尖頭で1本の花柄に花が

アメリカアサガオ		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1							0	
2							0	
3							0	
4							0	
5	1	1					2	
6		3	3	4	2		12	
7		2	6	9	3		20	
8		1	4	12	3		20	
9		3	6	32	8		49	
10	1	1	6	19	9		36	
11			1	1	1		3	
12		1					1	
合計	2	12	26	77	26	0	143	

1-3 個つくことはアサガオと同じだが、がく片の先端が半曲するところが本種の特徴となる。葉の形はアサガオにくらべると切れ込みが強い。競合などの生態系被害による影響が大きく、分布の拡大や拡散の可能性が高いといわれている。

生活段階の月変化 5月に幼植物が確認されている。6-11月 つぼみ・開花・結実が見られる。

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

群落の大きさ・広がり 大きさは4-9株、10-99株が一般的である。群落面積の報告では10㎡が普通。

アメリカアサガオ		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
a-fは株 g-lは㎡	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05㎡未満	0.25㎡未満	1㎡未満	10㎡未満	100㎡未満	100㎡以上	
1													0
2													0
3													0
4													0
5			2										2
6	1	3	2										6
7	1	2	3	1				1		2			10
8	2	1	5	2	1					1	2		14
9		18	12	2						1	1		34
10	3	9	8							1		1	22
11			1										1
12			1										1
合計	7	33	34	5	1	0	0	1	0	5	3	1	90

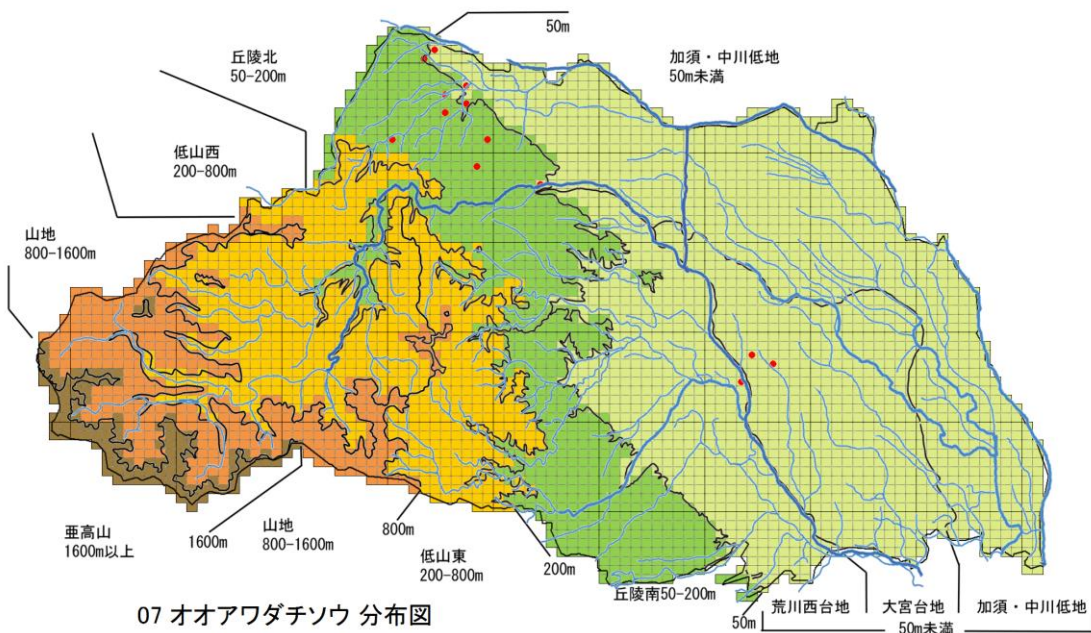
当該種の消長 日本への導入は観賞用として江戸時代に持ち込まれたとある。戦後、輸入食料品に混じって侵入したともいう。現在は全国的に分布しているが埼玉への定着ははっきりしない。1998年時点で件数は少ないが県内に広く分布していたようである。



7 オオアワダチソウ(キク科) *Solidago gigantea* subsp. *serotina* 重点対策外来種



オオアワダチソウ分布図



07 オオアワダチソウ 分布図

分布状況

3年間の調査では、報告件数が少なく大宮台地、丘陵北で確認されている。埼玉県植物誌1998によれば県西部にはやや少ないもののほぼ県全域に分布している。

レッドデータブック 2011 の調査で鷺宮・川越・上尾・中央区・桜区・八潮で観察された。埼玉県全54区画中、今回の調査の中では最も少ない5区画の報告であった。

オオアワダチソウ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	5	29.4
河川敷	B	6	35.3
水田・休耕田・畑	C	6	35.3
市街地	D	0	0.0
合計		17	100

環境別報告件数 報告件数は17件であった。環境別の傾向を述べることはできないが、河川敷と水田・休耕田・畑がそれぞれ35.3%の報告があった。雑木林でも報告があったが、市街地では確認されていない。データをもう少し多く集める必要がある。

種の概要 茎や葉の形状や花の様子がセイタカアワダチソウに酷似する。しかし本種の花期は7-9月

オオアワダチソウ		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1							0	
2							0	
3							0	
4							0	
5		4					4	
6		3			1		4	
7		3					3	
8		2					2	
9							0	
10	1	2	1	1			5	
11				1	1		2	
12							0	
合計	1	14	1	2	2	0	20	

であり、セイタカアワダチソウの10-11月開花と比べると開花期が重なることはないの
で見まちがうことはない。本種は茎にほとんど毛がなく舌状花の雄しべが極端に短いことでも確認できる。しかし実際は、オオアワダチソウをセイタカアワダチソウと誤解している場合が多々考えられ、オオアワダチソウのデータがセイタカアワダチソウの中に混じり込んでいる可能性がある。

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

生活段階の月変化 成葉だけの確認は5月からあるが、つぼみ・開花は10月になっている。

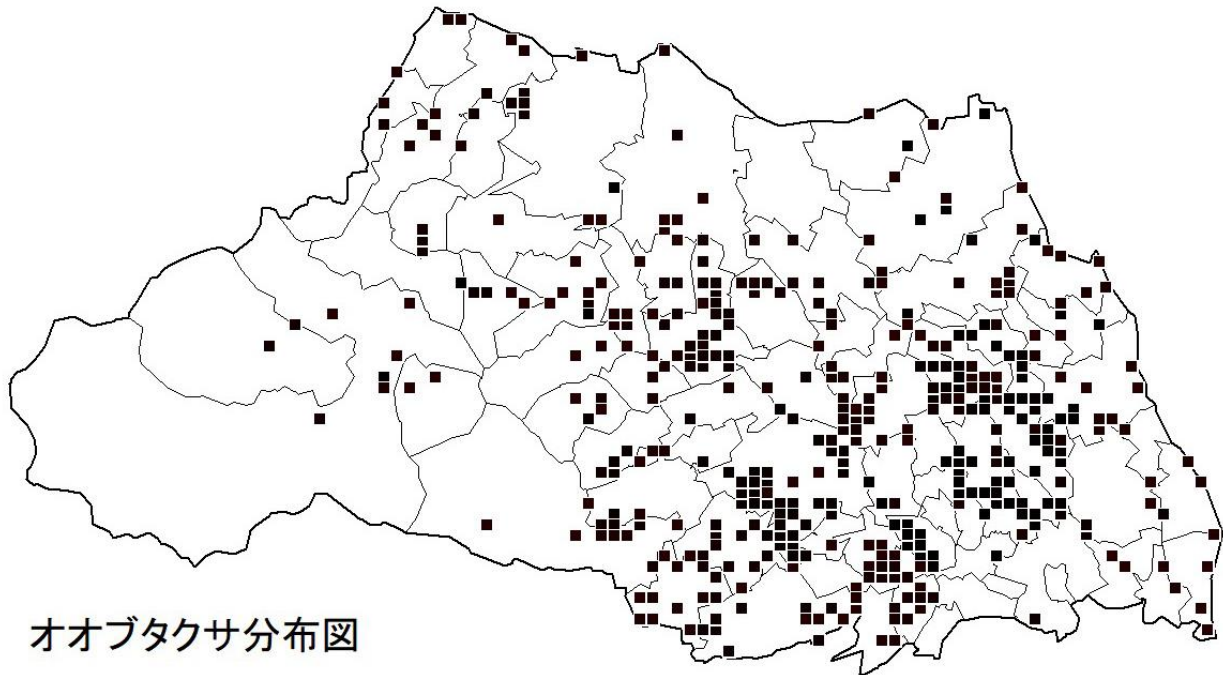
群落の大きさ・広がり 群落の大きさは10-99株より少なくなっており広がりは見られない。

オオアワダチソウ		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
a-fは株 g-lはm ²	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
1													0
2													0
3													0
4													0
5	1	1	2										4
6	1	1	2										4
7		1	2										3
8	1	1											2
9													0
10		1	2										3
11		1											1
12													0
合計	3	6	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17

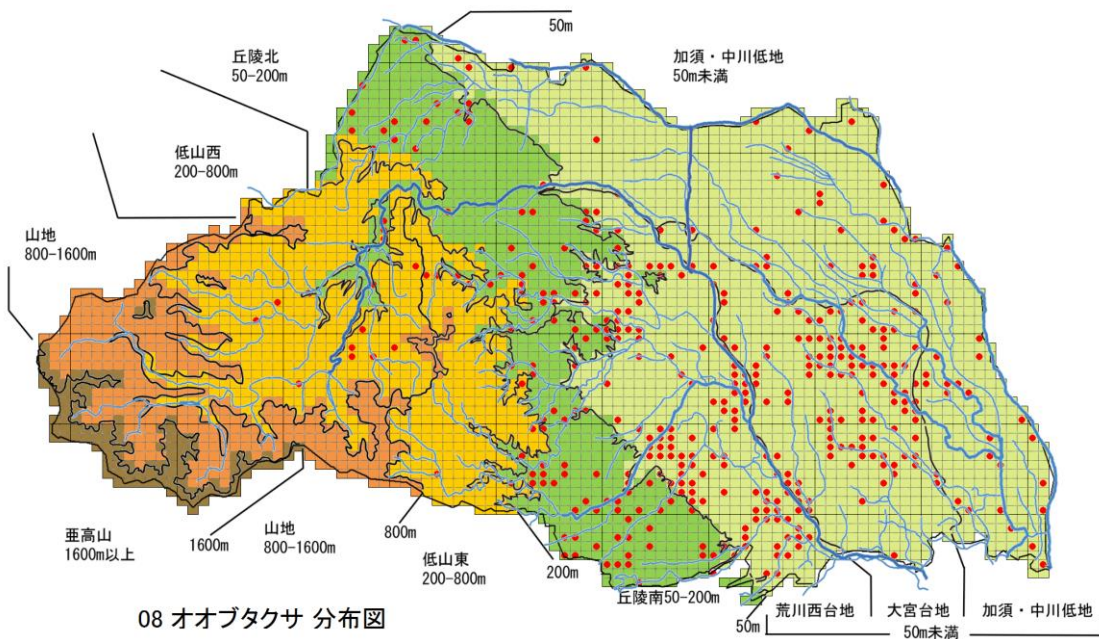
当該種の消長 もともとは明治時代に観賞用として持ち込まれたものである。その後、全国的に野生化したと考えられる。本県では1998年以前において県内に広く分布していたが、今回の調査ではごくわずかな報告しかなかった。調査年ごとに分布が狭まっている。このことから本種は減少しているとみるのが妥当なのであろうか。



8 オオブタクサ(キク科) *Ambrosia trifida* 重点対策外来種



オオブタクサ分布図



08 オオブタクサ 分布図

分布状況

3年間の調査では山地、亜高山を除く県内のほぼ全域で分布が確認されている。

埼玉県植物誌1998によればほぼ県全域に分布していた。県レッドデータブ

ック2011の調査もそれを裏付けるものであった。今回の調査では埼玉県全54区画中40区画とかなり多くの報告があった。

オオブタクサ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	75	11.7
河川敷	B	260	40.6
水田・休耕田・畑	C	221	34.5
市街地	D	84	13.1
合計		640	99.9

環境別報告件数 報告件数は640件であった。最も報告件数の多い環境は河川敷40.6%である。次いで水田・休耕田・畑34.5%、雑木林、市街地でもそれぞれ10%程度はある。あまり環境を選ばないで広範囲に分布している感がある。

種の概要 近縁種にブタクサがある。開花時期の花の様子はよく似ている。しかし葉の形が全くちが

オオブタクサ		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1							0	
2							0	
3							0	
4	1	4		1			6	
5	21	89	1		1	3	115	
6	17	131	6	7	1	1	163	
7	6	83	4	1		1	95	
8		25	10	12	2	1	50	
9		8	23	80	54	2	167	
10		6	8	33	87	25	159	
11		7	1	1	13	16	38	
12					11	13	24	
合計	45	353	53	135	169	62	817	

うので見まちがうことはない。ただし本種の葉の裂け方は一定でなく、裂けない葉もあり、3裂・7裂の葉もあり多様である。生態系に被害をもたらす可能性が高いとされ、特に絶滅危惧種の生育に甚大な被害をもたらす可能性が高いとされる。

生活段階の月変化 幼植物は4月に確認されている。5月には急激に成長し始め9月まで成長を続ける。つぼみと開花と結実の時期は同時進行で重なりが強く8-10月に盛んにお

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

こなわれる。

群落の大きさ・広がり 10-99株の大きさが一般的だが、100-999株の大きさにまとまることも多い。群落面積の報告では100㎡以上が一般的なようだ。

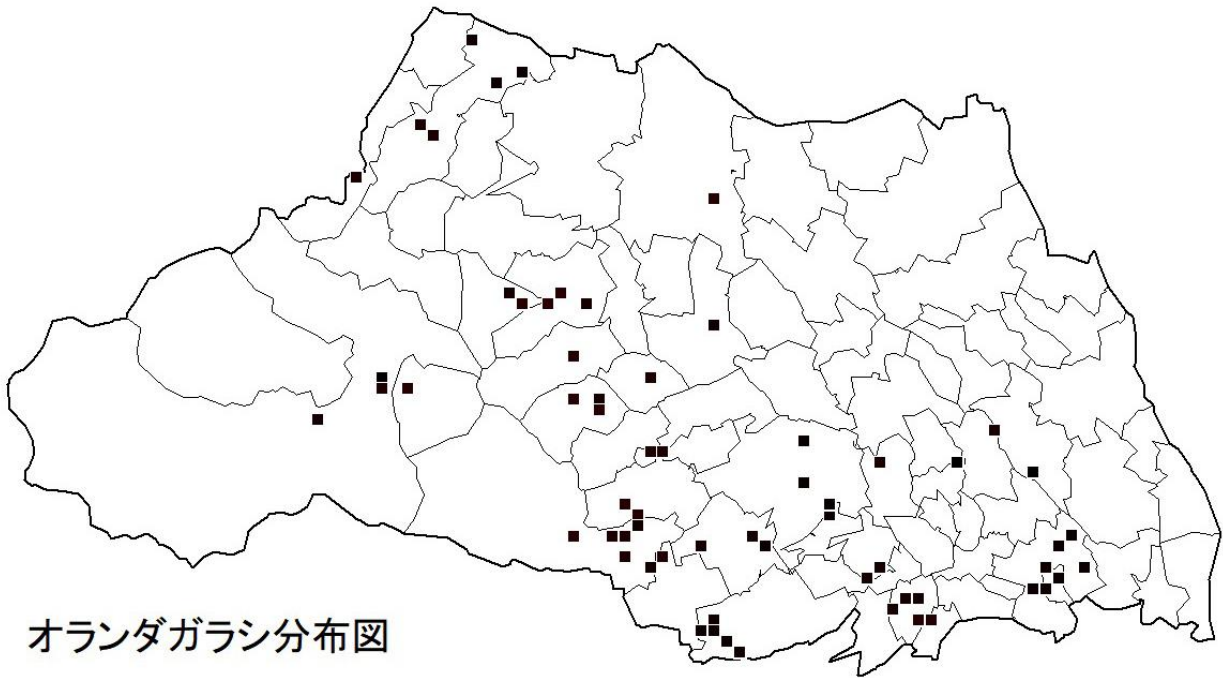
オオブタクサ		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05㎡未満	0.25㎡未満	1㎡未満	10㎡未満	100㎡未満	100㎡以上	
1													0
2													0
3													0
4			3	2									5
5	3	11	43	16	14	4				5	3	8	107
6	7	14	73	27	9	16					4	2	152
7	4	8	24	22	9	5				3	6	6	87
8	1	3	12	14	3						4	3	40
9	7	7	41	26	5					8	5	7	106
10	3	5	38	22	6	7		1		5	4	8	99
11	1	7	9	5	2					1		1	26
12		3	7	1	1	2					1	3	18
合計	26	58	250	135	49	34	0	1	0	22	27	38	640

当該種の消長 本種は関東地方において1953年に見つかったのが最初である。本県においては、1998年以前から徐々に分布の拡大を続けてきたが、最近の増減に対する評価は、「変わらず」とする調査員が多い。とりあえずは安定・定着段階に達したとみることもでき、すでにブタクサを凌駕しており、ブタクサはときどき見かける程度である。

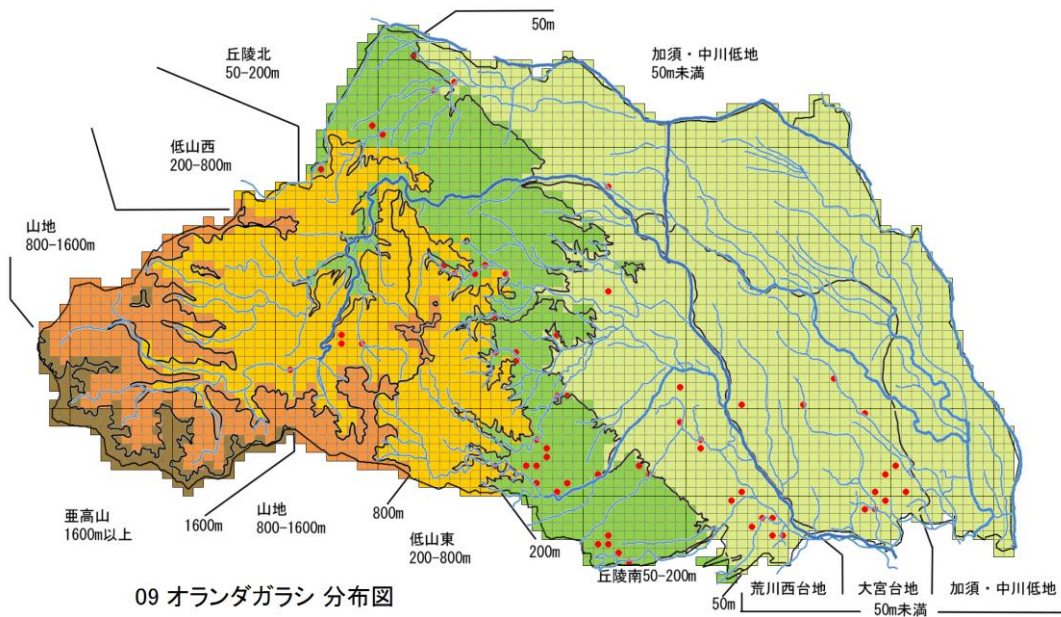
オオブタクサの優占した場所は明らかに在来種の分布域を狭めており、何らかの人為による駆除等の対策を考える時期に来ている。



9 オランダガラシ(アブラナ科) *Nasturtium officinale* 重点対策外来種



オランダガラシ分布図



09 オランダガラシ 分布図

分布状況

3年間の調査では大宮台地、荒川西台地、丘陵北、丘陵南、秩父域から報告があった。

埼玉県植物誌1998によれば荒川水系に広く分布している。県レッドデータブ

ック2011の調査においても荒川水系に分布が広がっている。今回の調査では埼玉県全54区画中21区画の報告があった。入間川流域にも分布を拡大しているようだ。

環境別報告件数 72件の報告があった。河川敷の報告が圧倒的に多く51.4%を占め、水田・休耕田

オランダガラシ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	8	11.1
河川敷	B	37	51.4
水田・休耕田・畑	C	17	23.6
市街地	D	10	13.9
合計		72	100

・畑が23.6%と続く。市街地、雑木林でも近くの用水路などで見られる。本種は水辺環境を必要とするが、水辺があればどこでも生育している。

種の概要 流水の縁に群生し、茎の下部は横に這い盛んに分岐する。春から夏、白の十字形花がつく。

オランダガラシ		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1							0	
2							0	
3							0	
4		1		1			2	
5		3	6	25	3		37	
6		7	2	7	6		22	
7		3	1	1	1		6	
8		6					6	
9		2	2				4	
10		2	1	1	1		5	
11	1	5					6	
12		3					3	
合計	1	32	12	35	11	0	91	

他のアブラナ科の植物にくらべて、果実に2稜があり、熟してもはじけない。茎や葉に毛がない。年間を通して成葉はいつでも見られる。外来種問題として課題を挙げるなら繁茂して水流を抑制する点があり、浮遊物質をはやく沈殿させ河床を浅くする影響をもたらすことは十分にあり得る。

生活段階の月変化 成葉の時期はほぼ1年中見られる。つぼみ・開花・結実は5-6月に見られる。

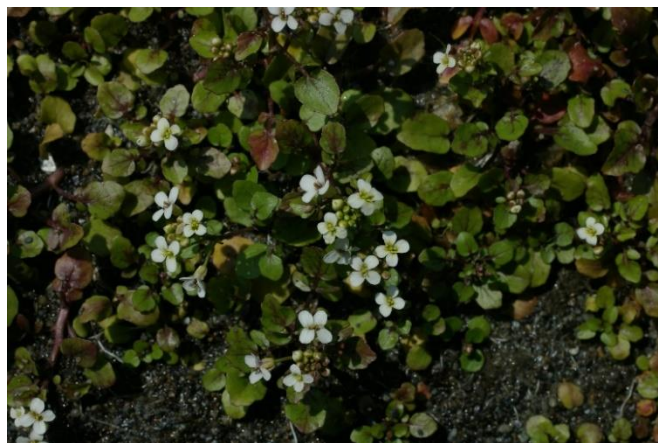
複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

れる。

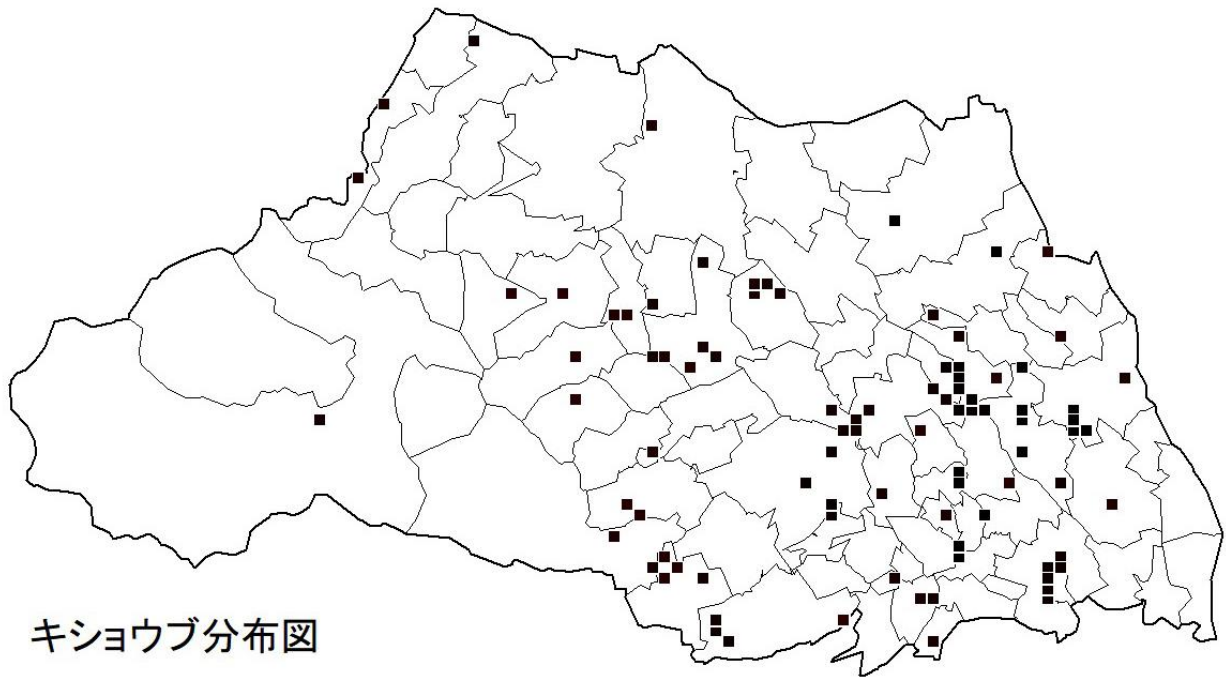
群落の大きさ・広がり 10-99株の大きさが一般的である。群落面積の報告では10m²未満が多い。

オランダガラシ		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
a-fは株 g-lはm ²	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
1													0
2													0
3													0
4			2										2
5	2		11	7				1	3	3	2		29
6	1	1	9						2	2			15
7		2	2										4
8		2	1	1						1		1	6
9		1	2							1			4
10			2							1			3
11		2	2							1	1		6
12			3										3
合計	3	8	34	8	0	0	0	1	5	9	3	1	72

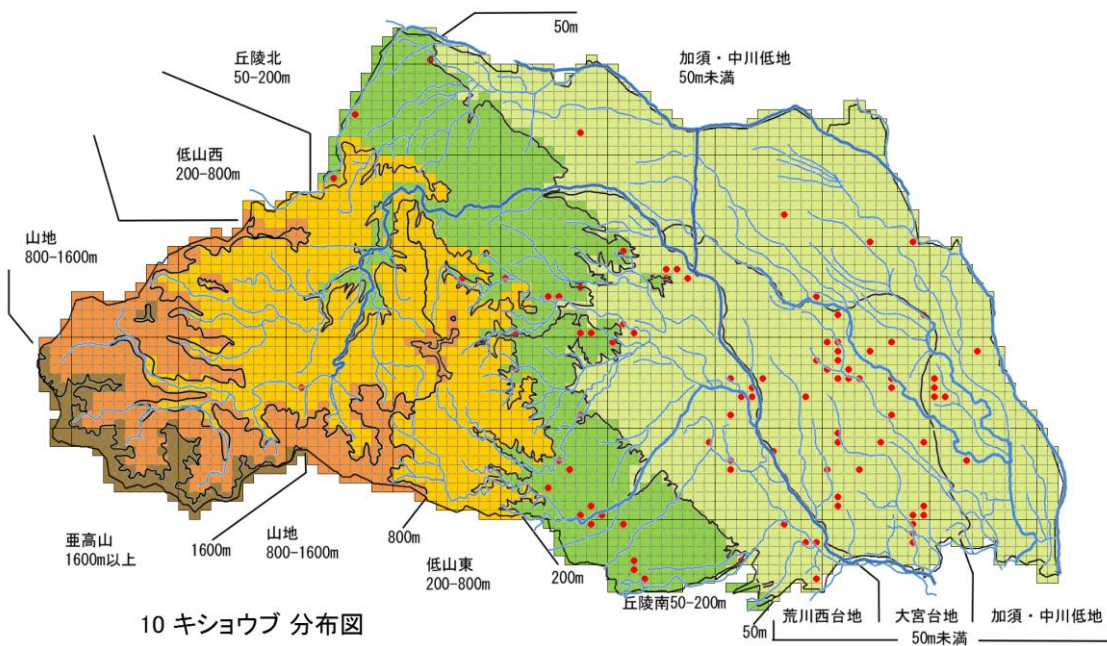
当該種の消長 明治時代、西洋料理の添え物として導入されたものが全国各地に広がった。水辺の環境があればどこにでも生育する。富栄養化した水質にも強い。渓谷といえども生育する。調査が進めば県全域に分布している実態が浮かんできてくのではないかと推測する。2008-2013年にモニタリング調査を実施した際、増減について、調査員の感触は「変わらず」が76%で、「やや増加」が14%、「やや減少」が9%であった。ほぼ定着しているとみてよいだろう。



10 キショウブ(アヤメ科) *Iris pseudacorus* 重点対策外来種



キショウブ分布図



10 キショウブ 分布図

分布状況

3年間の調査では、加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵南、丘陵北、低山西、低山東の報告があった。

埼玉県植物誌 1998 によれば、山地帯・亜高山

帯を除き県内全域に分布する。県レッドデータブック 2011 の調査では上記植物誌の分布を補完するものであった。今回の調査では埼玉県全 54 区画中 26 区画からの報告があった。

キショウブ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	13	11.0
河川敷	B	49	41.5
水田・休耕田・畑	C	38	32.2
市街地	D	18	15.3
合計		118	100

環境別報告件数 118 件の報告があった。河川敷が最も多く 41.5%であった。次いで水田・休耕田・畑 32.2%、市街地、雑木林と続く。本種の生育には水辺を必要とし、雑木林は水辺と隣接するところに自生が確認されている。

種の概要 花はアヤメに似て鮮やかな黄色。花被片は3個。大形で先が垂れ下がる。水辺に群生。開

花期に花被片が黄色であれば迷うことなくキショウブといえる。成長期や結実期は葉で区別しなければならない。他のアヤメ類と区別は困難である。キショウブの葉の中脈は太くて目立つ。カキツバタやアヤメの中脈は細くて目立たない。果実だけでなく、太く丈夫な根からの栄養繁殖によっても増える。

キショウブ		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1							0	
2							0	
3							0	
4				4			4	
5		15	14	57	11		97	
6		4	3	9	9	1	26	
7		3	1	1	2		7	
8		3					3	
9					3		3	
10	1	8					9	
11		3					4	
12	1	4					5	
合計	2	40	18	71	25	2	158	

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

生活段階の月変化 幼植物は10月以降に見られる。開花・結実の時期は4-9月とかなり長い。

なり長い。

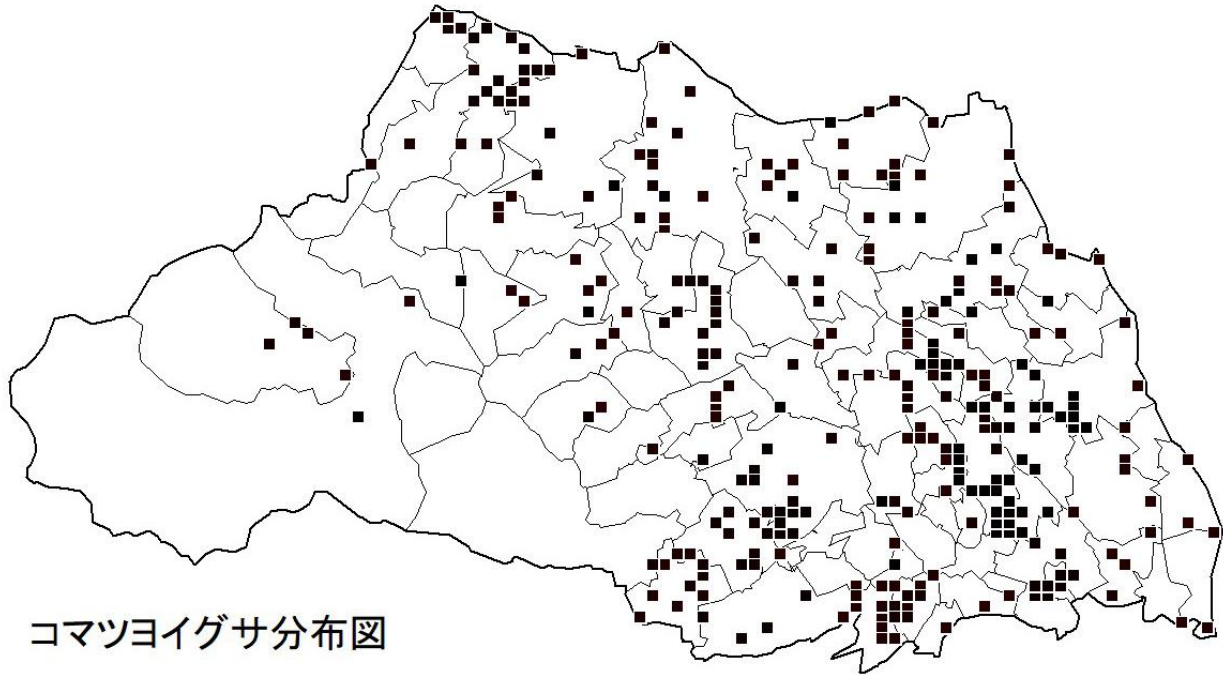
群落の大きさ・広がり 大きさは10-99株が最も一般的である。群落面積の報告では10㎡未満が多く見られる。

キショウブ		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05㎡未満	0.25㎡未満	1㎡未満	10㎡未満	100㎡未満	100㎡以上	
1													0
2													0
3													0
4		4											4
5	1	8	30	15		1		1	1	8			65
6	1	1	11	4					1	1	1		20
7		1	2	2					1				6
8			1	1						1			3
9			3										3
10		1	4	3									8
11			2	2									4
12		1	2	1					1				5
合計	2	16	55	28	0	1	0	1	4	10	1	0	118

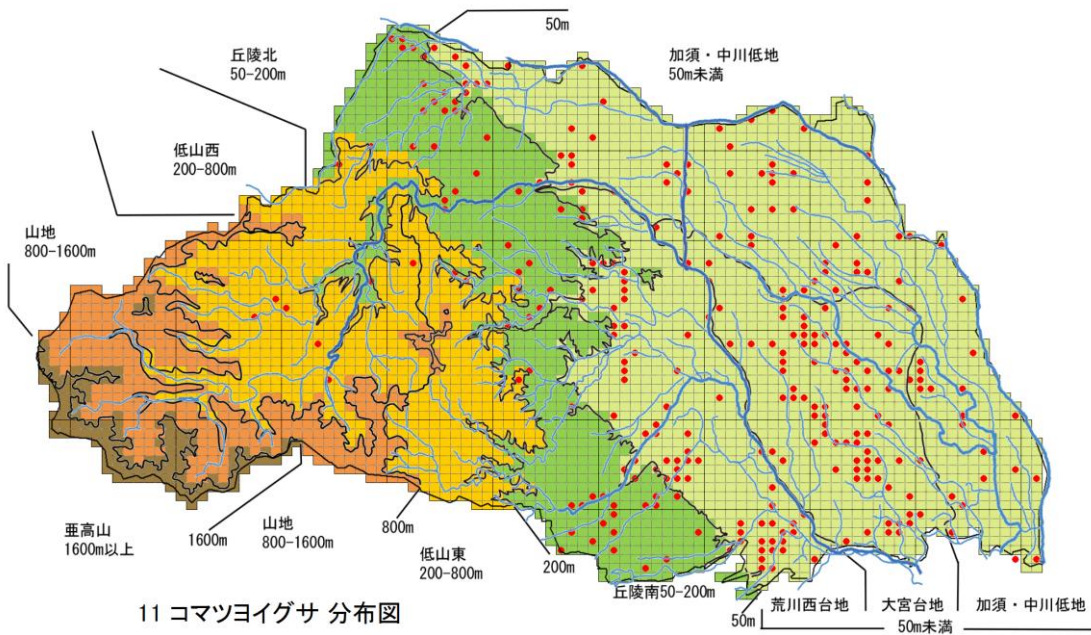
当該種の消長 明治末に花卉として導入された。ハナショウブ類は青～ピンク系統であったので黄色のキショウブは高く評価されたらしい。やがて栽培株が逸出し野生化するようになった。本県では1998年すでに全県的分布であった。県内では安定的に定着していると考えてよい。



11 コマツヨイグサ(アカバナ科) *Oenothera laciniata* 重点対策外来種



コマツヨイグサ分布図



11 コマツヨイグサ 分布図

分布状況

3年間の調査では、ほぼ県全域に分布することが明らかになった。埼玉県全54区画中38区画から報告があった。

埼玉県植物誌1998によれば、加須・中川低

地、大宮台地、荒川西台地、丘陵北、丘陵南に分布、ただし比企郡には記録がない。県レッドデータブック 2011 の調査では県南部の全域に生育を確認した。

コマツヨイグサ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	19	4.8
河川敷	B	99	24.9
水田・休耕田・畑	C	121	30.5
市街地	D	158	39.8
合計		397	100

環境別報告件数 報告件数は397件であった。環境別に報告の多かったのは市街地 39.8%、水田・休耕田・畑 30.5%、河川敷 24.9%、雑木林の順になる。あまり環境を選ばずどこにでも出現する。

種の概要 日当たりのよい道ばたのような環境に這うように広がる。茎は多少斜上する場合もあるが

コマツヨイグサ		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1							0	
2							0	
3							0	
4		2	1		3		6	
5		1	19	25	62	13	120	
6		2	14	44	123	44	229	
7			11	26	72	24	133	
8			3	4	20	8	35	
9			3	10	27	19	59	
10		3	8	7	19	16	55	
11			2	3	5	5	18	
12			1		2	1	4	
合計		8	62	119	333	130	659	

直立することはない。近縁種メマツヨイグサ(アレチマツヨイグサ)の茎は直立する。本種の葉の縁は羽状に浅く切れ込み波打つ。花弁は4個で黄色。花は夜咲き、しばむと赤くなり目立つ。

生活段階の月変化 幼植物は4-10月に見られる。つぼみ・開花・結実もほぼ一年中重なって生活段階を繰り返しているようだ。

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

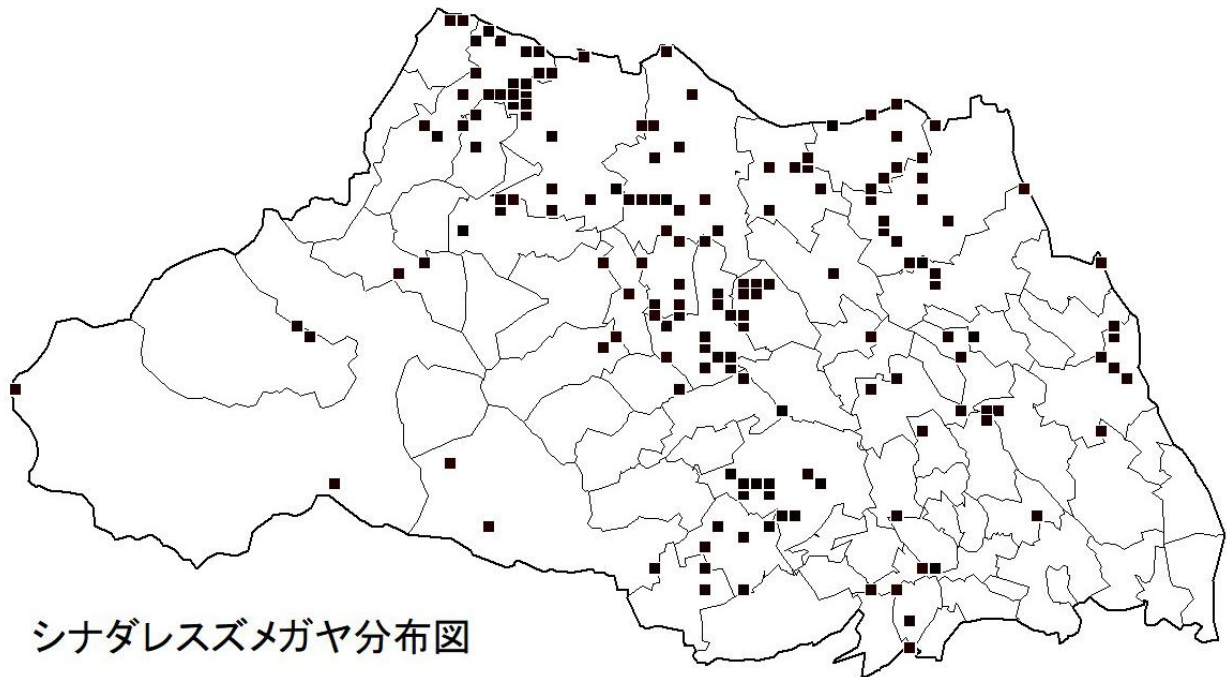
群落の大きさ・広がり 10-99株が一般的だが大きさはさまざまで、至るところに広がり場所に合わせて群落を形成しているようだ。

コマツヨイグサ		群落の大きさ・広がり月の月変化(2016-2018年)											合計
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
a-fは株 g-lはm ²	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
1													0
2													0
3													0
4	1		5										6
5	10	15	34	16	1					4			80
6	11	24	61	23	7	4	2			4	1	1	138
7	7	7	42	13	1	1				2	2		75
8	4	2	7	3			1			1	3		21
9	2	9	10	7						1			29
10	8	7	15	1						2	1		34
11	1	1	8	1									11
12	1	1	1										3
合計	45	66	183	64	9	5	3	0	6	14	1	1	397

当該種の消長 1910年代(明治末期)に侵入したといわれている。本県では1998年において平地や台地に多く分布し、丘陵帯や山地帯ではあまり見られない状況だった。しかし今度の調査では、山地でも確認されておりほぼ県内全域に分布を広げているように見られる。



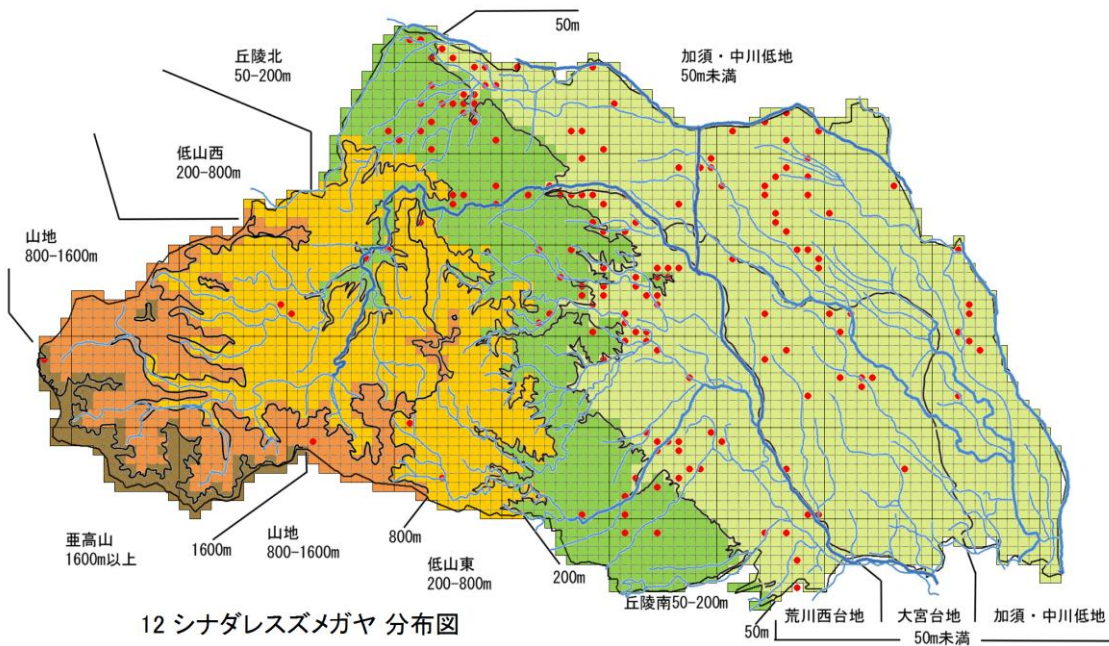
12 シナダレスズメガヤ(イネ科) *Eragrostis curvula* 重点対策外来種



シナダレスズメガヤ分布図

分布情報

3年間の調査では、加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵南、丘陵北の報告が多かった。低山西、低山東、山地でも報告があった。 埼玉県植物誌



12 シナダレスズメガヤ 分布図

1998によれば、秩父地域・県北部・県東部に記録があり、自動車道に砂防用として植栽したものが逸出したものである。県レッドデータブック 2011の調査による分布は、埼玉県植物誌 1998の分布と重なる。今回の調査では埼玉県全 54 区画中 33 区画から報告があった。

シナダレスズメガヤ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	14	6.8
河川敷	B	46	22.4
水田・休耕田・畑	C	58	28.3
市街地	D	87	42.4
合計		205	99.9

環境別報告件数 報告件数は 205 件であった。環境別に市街地が最も多く 42.4%である。次いで水田・休耕田・畑が 28.3%、河川敷 22.4%、雑木林の順となる。日当たりの良い開けた場所であれば、あまり環境を選ばないものと思われる。

種の概要 茎は高さ 60–120 cm。茎は密に束生、叢生して大きな株を作る。葉幅 2 mmの葉が根本から

シナダレスズメガヤ 生活段階の月変化(2016–2018年)							
月\生活段階	1	2	3	4	5	6	合計
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死	
1							0
2							0
3							0
4		3		1			4
5		3	13	35	11	2	64
6		3	9	47	22	1	82
7		1	2	20	8		31
8		2		15	6		23
9	2		3	9	11	2	27
10		6		15	12	3	36
11		1	1	1	4	2	9
12	2					2	4
合計	4	19	28	143	74	12	280

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

多数出て、先端が地面に届くほどしなだれているのが特徴。葉鞘の口部に長毛がある。枝の分岐点は膨れて白毛がある。夏、茎の先に長さ 20~40 cmの円錐状の花序を出す。花序は先が傾き、小花はやや紫色を帯びる

生活段階の月変化 イネ科の特徴として、つぼみ、開花、結実は一見して区別できないものが多く、生活段階を分けることが難しい。開花の時期も連続してははっきりしない。

5-10月まで半年間にわたり何時でもすべての生活段階が観察できる。

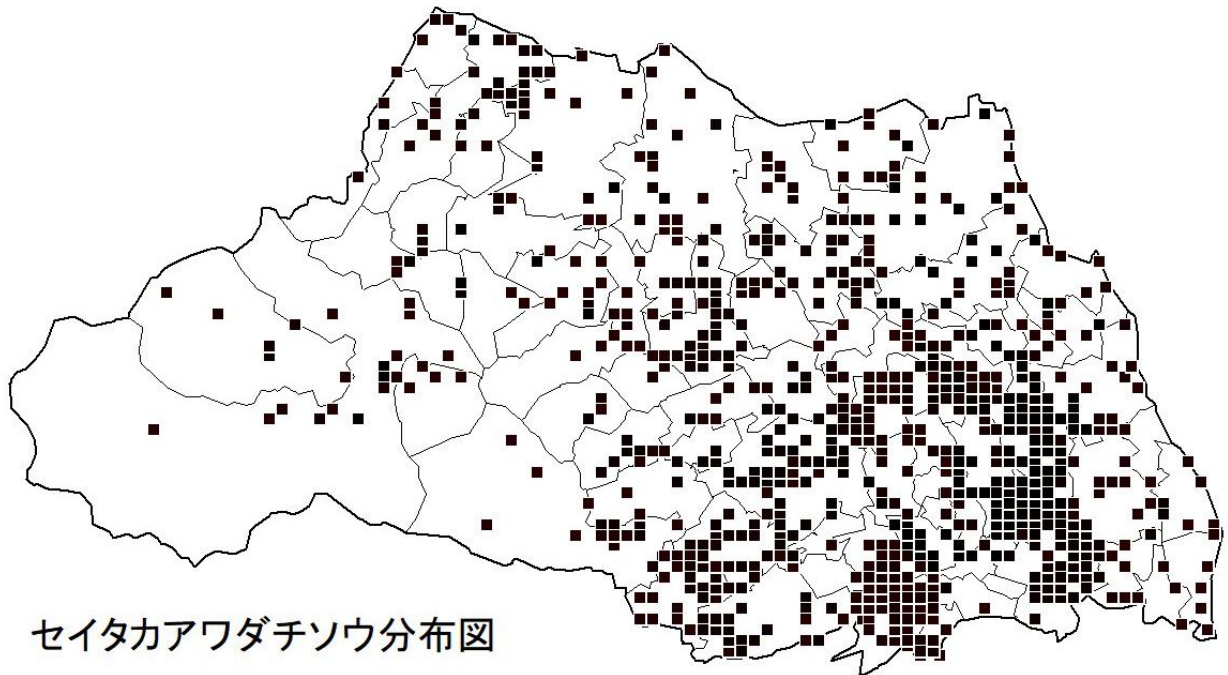
群落の大きさ・広がり 大きさは10-99株が一般的であるが100-999株の大きさにまとまることもある。

シナダレスズメガヤ 群落の大きさ・広がり(2016–2018年)													
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	合計
a-fは株 g-lはm ²	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
1													0
2													0
3													0
4			2	2									4
5	1	4	13	22	3				1	1			45
6	2	5	25	13	3	10				2			60
7		1	12	8	1	5	1						28
8	1	1	4	7	1				1		2	1	18
9		3	12	1									16
10		2	14	6	3					3			28
11		1	2	1									4
12		2											2
合計	4	19	84	60	11	15	1	0	2	6	2	1	205

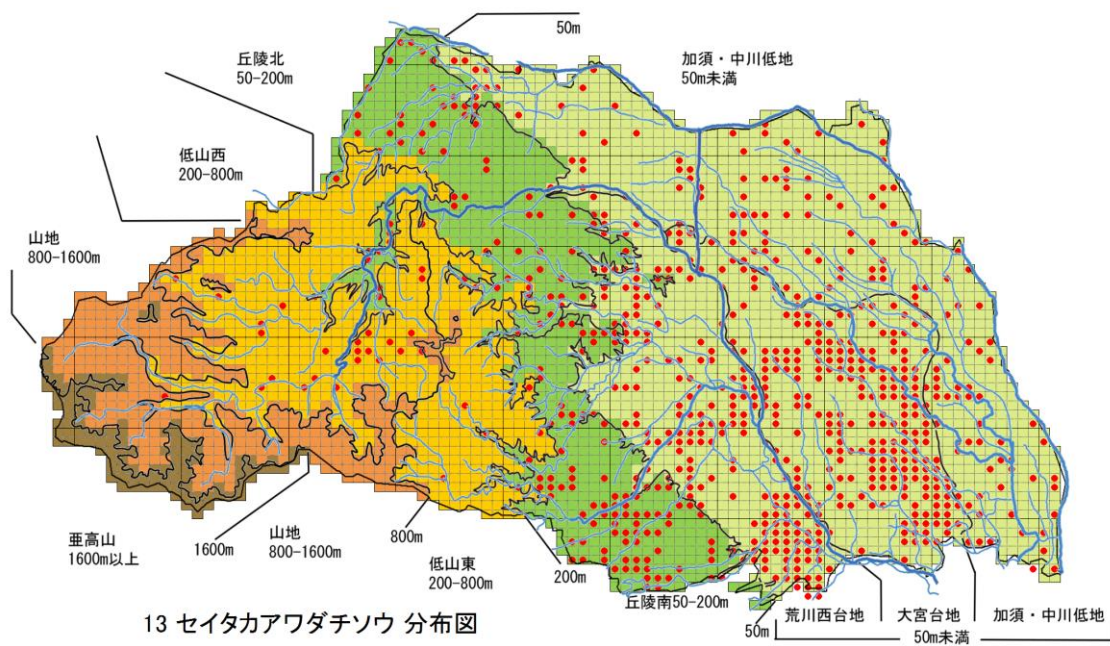
当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、第二次世界大戦前、砂防用に導入し、その後、全国に分布した。埼玉県では県内全域の自動車道に植栽された経緯があるため、県内全域に分布している。今回の調査では今まで記録の少なかった県西部の報告が加わった。県南部や県東部にも分布があると思われる。種子生産量がきわめて多く、雨や風によっても伝播されるため今後ますます広がっていく可能性が高い。



13 セイタカアワダチソウ(キク科) *Solidago altissima* 重点対策外来種



セイタカアワダチソウ分布図



13 セイタカアワダチソウ 分布図

分布情報

3年間の調査では、亜高山帯を除く県全域で分布の確認ができた。今回の調査では埼玉県全54区画中45区画から報告があった。最も多い報告

区画数で全域分布といえる。

埼玉県植物誌 1998 によれば、秩父市大滝を除き、県内全域にまんべんなく分布している。県レッドデータブック 2011 の調査でも同様の分布が確認され定着とみなされている。

セイタカアワダチソウ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	138	10.1
河川敷	B	384	28.1
水田・休耕田・畑	C	436	31.9
市街地	D	408	29.9
合計		1366	100

環境別報告件数 報告件数は最も多い 1366 件であった。水田・休耕田・畑 31.9%、市街地が 29.9%、河川敷 28.1%と雑木林以外の環境での数値は互いに拮抗している。あまり環境を選ばない感があるが、日照を好む植物のようで開けた場所があればどこでも見られる。

種の概要 秋、茎の先に大きな円錐花序が開く。類似種にオオアワダチソウがある。しかしオオアワ

ダチソウはあまり見かけない。本種は葉や茎に堅い毛を密生するが、オオアワダチソウの茎はほとんど無毛で表面はなめらかである。本種の花期は晩秋。横走する地下茎があるため大きい群落を作る。

月\生活段階	1	2	3	4	5	6	合計
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死	
1						1	1
2							0
3	1						1
4	5	6		1		1	13
5	20	213	5	10	4	2	254
6	24	300	10	15	6		355
7	12	168	7	8	1		196
8		54	11	8	4		77
9	1	59	61	46	13	1	181
10	7	65	92	190	50	2	406
11	8	20	18	73	64	23	206
12	7	10	3	8	35	16	79
合計	85	895	207	359	177	46	1769

生活段階の月変化 4月から12月までほぼ1年中すべての生活段階が観察できる。

群落の大きさ・広がり 大きさは10-99株が一般的であるが100-999株の大きさにまともなることもある。

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	合計
a-fは株 g-lはm ²	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
1				1									1
2													0
3			1										1
4	1	1	4							1	4		11
5	1	19	80	63	26	14			2	8	18	11	242
6	8	30	134	56	44	38		1	1	3	8	8	331
7		7	63	49	21	16			3	5	6	14	184
8	1	2	25	15	6	3			1	6	7	2	68
9	2	11	61	27	13	3				6	9	5	137
10	4	18	70	68	20	14		2	2	5	11	15	229
11	6	14	32	29	9	9				2	6	6	113
12	3	7	16	12	4	1			1	1	4		49
合計	26	109	486	320	143	98	0	3	10	37	73	61	1366

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、明治年間に導入、第二次世界大戦後に温暖地を中心に広く分布を広げた。本県でも、分布は県全域に広がっており、もはや普通に見られる種として定着している。最近ではサビ病や食害するアブラムシ等が発生し、かつてよりは勢力が衰えているようだ。

